刺青・高野聖・変身

（サロメ付）

目次

刺青
概略（あらすじ）
一、　その後の展開
高野聖（ひじり）
概略（あらすじ）
一、　煩悩（欲望と感情）
二、　人間の二大欲
三、　結び
変身（カフカ）
一、　家族の目
二、　他人の目
三、　あるがままの人間
四、　変身（表面的現象）
五、　カフカの「変身」
六、　対応の仕方
サロメ
一、　マルコ伝
二、　マタイ伝
三、　主な登場人物たち
四、　戯曲『サロメ』の「内容」
五、　その他
※　参考文献

刺
青

## 「刺青」について

例えば、谷崎潤一郎に『刺青』という有名な作品があるが、それは、次のような内容になるかと思う。つまり、「……当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった。誰も彼も挙って美しからむと努めた揚句は、天禀の体へ絵の具を注ぎ込むまでになった……」ということである。

さて、清吉という若い刺青師の腕利きがあった。彼は、奇警な構図と妖艶な線とで名を知られ、そして、彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持ち、また、一切の構図と費用とを彼の望むがままとして、その上、堪え難い針先の苦痛を、一つ月も二つ月も堪え得るような人でなければ刺らなかった。この若い刺青師の心には、人知らぬ「快楽と宿願」とが潜んでいた。その「快楽」とは、大抵の男は、苦しき呻き声を発するが、その呻き声が激しければ激しい程、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであった。そして、刺青のうちでも殊に痛いと云われる朱彫、ぼかしぼり、それを用うる事を彼は殊更喜んだ。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込むことであった。素質と容貌とに就いては、いろいろな注文があった。啻に美しい顔、美しい肌とのみでは、中々満足する事が出来なかった、彼の気分に適った味わいと調子の女性は容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく過ぎようとしていた。

丁度四年目の夏のとある夕べ、深川の料理屋の前を通りかかった時、彼はふと門口に待っている駕籠の簾のかげから、真っ白な女の素足のこぼれているのに気づいた。その女の足は、彼にとっては尊き肉の宝玉であった。拇指から起って小指に終る繊細な指の整い方、この足こそは、男の生血で肥え太り、男のむくろを踏みつける足であった。この足を持つ女こそは、彼が永年たずねあぐんだ、女の中の女であろうと思った……。

さて、ここまでの「内容」は、清吉という若い刺青師の腕利きがいたが、その彼の「年来の宿願」というのは、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込むことであった。しかも、その女性は、男性に従順に傅くような女性ではなく、むしろ男の生血で肥え太り、男のむくろを踏みつけるような、女の中の女を探し求めていたということである。それでは、なぜ、彼は、そのような女性を捜し求めていたのかと問えば、それは、光輝ある美女の肌を得て、その光輝ある美女の肌に刺り込みたいと願った「絵柄」こそは、まさに「女郎蜘蛛」であったからである。つまり、彼が描きたいと願っていた「女郎蜘蛛」というのは、まさに「……男を肥料として肥え太り、男を踏み台にしてのし上がっていく、まさに女の中の女」でなければならなかったからである。それゆえ、そのような天性の「性分」（生まれつき）の女性を探し求めていたということである。

つまり、そもそも彼は、なぜ「女郎蜘蛛」を刺り込もうと思ったのか？　それは、まず、女の中の女とは、一体、どういう女だろうかと考えた時に、まず、男に踏みにじられる、そのような弱い女ではなく、むしろ強い女、しかも、ただ強いだけではなく、むしろ男を肥料として肥え太り、男を踏み台にしてのし上がっていく女、それが、まさに「女の中の女」であり、それを動物に喩えて言えば、それこそ、まさに「女郎蜘蛛」に他ならないということである。つまり、「女郎蜘蛛」というのは、まさに「女の中の女」の象徴である。

＊　＊

さて、五年目の春も半ばの頃、彼の馴染みの使いでやってきた十六、七の娘が、実はこ

の前の女性であると知ると、彼は、座敷に招き入れて、彼女に二つの「巻物の絵」を見せることになる。一枚は、暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵であり、もう一枚は、若い女性が桜の樹に身を倚せて、足下に累々と斃れている多くの男たちの屍骸を見つめている絵であった。それでは、なぜそのような絵を見せようとしたのか？　それは、彼女の「心の反応」を見るためである。つまり、その女性の持って生まれた天性の「性分」がどういうものであるかの確認を得るためである。そして、「……この絵にはお前の心が映っているぞ」、「……どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せになるのです」、「……この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交っている筈だ」、「……これはお前の未来を絵に現わしたのだ。此処に斃れている人たちは、皆これからお前の為に命を捨てるのだ」、「……後生だから、その絵をしまって下さい」と云いながらも、やがて、「……親方、白状します。私はお前さんの察しの通り、その絵の女のような性分を持っていますのさ」と。そこで、彼（清吉）は、懐に隠し持っていた麻睡剤の壜を取り出して、それを使って彼女を眠らせることにするのであった。……

そして、彼女が眠っている間に、彼は、朝から翌日の朝までかけて、彼女の背中に「女郎蜘蛛」を刺り進め、清吉は、その朝、暫く絵筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めていた。――その「刺青」こそ、まさに「彼が生命のすべて」であった。その仕事をなし終えた後の心は空虚であった。そして、最後の仕上げとして「湯殿」に入って色上げをすれば、それで完成と成るものであった。そして、「……己は、お前をほんとうの美しい女にするために、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ。もう今から日本国内に、お前に優る女は居ない。お前はもう今までのような臆病な心は持ってはいないのだ。男と云う男は、みなお前の肥料になるのだ……」と。つまり、この若き刺青師も、所詮は「最初の肥料」に過ぎなかったということである。それゆえ、ここからこそ、彼女の「第二の人生」が始まろうとしている。ところが、作者は、ここで敢えて筆を止めてしまったのである。あとは、この「女性」がこれからどういう人生を辿るかは、むしろ「読者にゆだねた」ということになるのだろう。

## 一、その後の展開

そこで、敢えてこの女性の「第二の人生」がどうなったかをあれこれ妄想してみると、彼女は、いわば「美しい女性」であるので、やがて「女主人公」（ヒロイン）となって輝き出すことは間違いないが、その場合、次のような「二つの展開」が考えられるかと思う。その一つは、作者が意図したように、文字通り、いわゆる「女郎」（つまり「女郎蜘蛛」）となってのし上がっていくという「考え方」であり、この「考え方」であれば、誰もが容易に想像できるものであり、敢えてその先の展開を描く必要はないということになるのだろう。そして、もう一つの「考え方」としては、彼女は、「悪女」にはなりきれなかったという展開である。それは、清吉の予想に反して、彼女は、「善き魂」を宿していたので、どうしても「悪女」にはなりきれなかったという展開である。そこで、彼女は、やがて、新たな「女主人公」（ヒロイン）となって輝き出すのである。それは、「女主人公」（ヒロイン）であるので、「悪人」ではないが、また、「善人」そのものでもなく、むしろ「悪と善」との葛藤に悩み苦しみながらも、その時と場所とに応じて、様々な「姿」を魅せる

という展開である。それゆえ、彼女は、自ら手を下すようなことはしないが、彼女の何とも抗しがたい「魔力」に魅せられて、男の方から自ら滅んでしまうのである。特に、彼女の「背中の刺青」を見てしまった人は、男女問わず、その魔性の美に「魂」を奪われてしまい、もう身動きできなくなるとともに、彼女の言には逆らい難いものを感じて、いわば彼女の「魔力の虜」と化していくのである。そして、彼女は、次から次へと、その時々の目的を達成していくことになる。そして、最終的には、女性たちの上に立つことになるが、それは、女性たちのまさに「救世主」となっていくということであり、様々な「場面や状況」のなかで、男たちに踏みにじられている女性たちの「救世主」となって行くのである。それは、何の罪もない女性たちが男たちに無残に残虐に踏みにじられる姿を見ると、彼女の「血が抗しがたく騒ぐ」からであり、もちろん、人を殺すような方法（手段）ではなく、むしろ男の方が彼女の何とも抗しがたい「魔力」に魅せられて、自ら滅んでいくのであり、それは、相手に応じて、金なら金で、色なら色で、酒なら酒で、賭けなら賭けで、地位なら地位で、知力なら知力で、その他の何らかで仕掛けていくのである。それでは、なぜ、彼女は、いわゆる女性たちの「救世主」となっていくのだろうか？　それは、まさに「女の中の女」だからである。つまり、彼女は、そういう生まれながらの「運命（宿命）」（女郎蜘蛛）を、つまり、「悪男狩り」を背負ってこの世に生まれて来ているということである。そして、彼女は、やがて伝説となって、長く語り継がれていくという展開になるのである。

＊　　＊

熱き肌に
宿る女郎蜘蛛の
宿命かな

高野聖（ひじり）

## 「高野聖」について

例えば、泉鏡花の『高野聖』という作品は、非常に有名な作品であるが、その「内容」は、次のようなものである。それは、「……私は、旅の途中、汽車の中で、一人の旅僧に出会った。その旅僧は、聞けばこれから越前へ行って、派は違うが永平寺に尋ねるものがあるとのこと、ただし、敦賀に一泊してからということである。一方、若狭へ帰省する私もおなじ処で泊らねばならないのであるから、其処で同行の約束ができた。旅僧は、高野山に籍を置くものであり、年は、四十五、六で、柔和で、おとなしやかな風采であり、後で聞くと、宗門名誉の説教師で、六明寺の宋朝という大和尚ということであった。そして、二人は、同じ旅籠に泊まることになるが、何よりも最も耐え難いのは晩飯の支度がすむと、忽ち灯りを行灯に換えて、薄暗いところでお休みなさいと命令されるが、私は、夜が更けるまで寐ることができないたちであり、そこで、旅僧は、若い頃に、こういうことがあったという話を私にしてくれることになったということである……」。

そして、その旅僧の「話」というのは、次のようなものであった。つまり、「……山また山という奥深い山を越えて、旅の僧は、名代の天生峠へと向かっていたが、その歩み進む山道では、夏の暑さと草いきれのなか、汗をかきながら、草むらでうごめく様々なヘビに出くわしたり、また、雨が降るがごとき数多くの山蛭に全身の血を吸い取られて、痛いのか、痒いのか、それとも爍ったいのか得もいわれぬ苦しみに悩まされながらも、やがて、前途に、ヒイイと馬の嘶くのが谺して聞えた。その峠には孤屋（一軒家）があり、そこには、二十二、三歳の白痴の少年と、一人の、小造の美しい、声も清しい、ものやさしい婦人と、もう一人、親仁（下男）が住んでいた。旅僧は、一晩の泊まりをお願いすると、しばらく考えてから、婦人は、「……お泊め申しましょう。さぞまあ、お暑うございましたでしょう」。「……この裏の崖を下りますと、綺麗な流がございますから一層それへ行らっしゃってお流しが宜ゅうございましょう。丁度、私も米を研ぎに参ります」といって、少年の面倒は、親仁に預けて、二人で一緒に谷川へと下りていくことになる。

そして、月夜の下、旅僧が身を屈めて、川の水で二の腕を洗っていると、婦人は、「……すっぱり裸体になってお洗いなさいまし、私が流して上げましょう」といって、旅僧の着ているものを脱がせ、そして、背中の山蛭の傷を見て驚き、両方の肩から、背中、横腹、臀にさらさら水をかけては、手は綿のように優しくさすってくれる。「……その心地の得もいわれなさで、眠気がさしたでもあるまいが、うとうとする様子で、疵の痛みは遠のき、ひたと附ついている婦人の身体で、私は花びらの中に包まれたような工合。その不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に天窓まで一面に被さったから吃驚、石に尻餅を搗いて、足を水の中に投げ出して落ちたかと思う途端に、女の手が背後から肩越しに胸をおさえたのでそれに確りつかまった」。そして、婦人は、「……私は、飛んだ暑がりなんでございますからと、何時の間にか衣服を脱いで全身を練絹のように露して、今どきは、毎日二度も三度も来てはこうして汗を流します」と云う。そうすると、いろいろな所から様々な動物たちが集まって来るのであった……。

さて、二人は、再び、孤屋（一軒家）に戻り、親仁は、旅僧が「人間の姿」のまま戻って来たことに驚くが、厩から一頭の馬（実は富山の薬売り）を門前に引き出して、これから諏訪の湖の辺まで馬市へ出すということであり、いやがる馬を婦人がなだめて、山

路をしゃん、しゃんと下りていった。その後、三人（白痴と婦人と旅僧）で夕食を食べた後、床につくことになるが、そうすると、家のまわりを実に様々な動物たちが取り巻くような気配に満ちて、戸の外のものの気配は動揺を造るが如く、ぐらぐらと家が揺いだ。旅僧は、一心不乱に念仏を唱えると、夫婦が閨もひっそりとした、とある。……

翌朝、正午頃、里の近く、滝のある処で、昨日馬を売りに行った親仁の帰りに出逢う。旅僧は、「……丁度私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送ろうと思っていた処」であり、それは、昨夜、婦人から、世の中へ苦労をしに出るよりも、ここに私の傍においでなさいと云われたことと、また、婦人が不便でならない。深山の孤家に白痴の伽（夫婦として暮らして世話）をしながらも言葉も通ぜず、言葉すら忘れそうになっている。せめて傍につき添って、朝夕の話相手となり、山で木の実を拾って、料理の手伝いをしたり、また、障子の外と内で、話をしたり、笑ったり、そして、谷川で二人して、その時に婦人が裸体になって私が背中へ息が通って、微妙な薫の花びらに暖に包まれたら、そのまま命が失せても可い、と思っていた。しかし、親仁に諭されて、旅僧は、人間の姿のまま山を下りていくことになるのである。それは、なぜか？　旅僧は、彼女に心を奪われたが、しかし、それは、いわゆる「性欲」そのものからではなく、つまり、セックスそれ自体は、むしろ「拒絶」（つまり「避けている」）のであり、むしろ彼女を不便と思って、傍につき添っていたからであり、もし、「性欲」そのものからであれば、その旅僧も、そこに留まり、やがては何らかの動物に変えられていたということである。

それでは、この婦人は、一体、何者かと問えば、もともとは、医者の娘であり、そこにやってくる患者に優しく話しかけたり、また、体にふれたりすると、不思議と患者の痛みがやわらいだりして、それが評判になり、数多くの患者がやってくるようになる。その中に、親と一緒にやってきた一人の子供は、脚に難渋な腫物があり、手術をしたが、なかなか治らずに、親は医者にその子を預けて、子供はそのままそこに留まることになるが、それが白痴の少年なのである。そして、峠にはもともと二十軒ぐらいの家並みがあったが、十三年前、大洪水でほとんど流されて多くの人たちも犠牲になり、残ったのは、三人と一軒家だけであったとともに、婦人は、ますます不思議な力（神通力）のようなものを身につけて、峠で迷った旅人を誘惑しては、飽きると様々な動物に変えていたのである。

## 一、煩悩（欲望と感情）

さて、この「山越え」を宗教の「修行」での諸段階というように仮に考えた場合、例えば、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には実に様々な「欲望や感情」などが絶えず現われたり消えたりしている状態であるが、その様々な「欲望」としては、例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、支配欲、独占欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他、また、様々な「感情」としては、例えば、快・不快、怒り、恐れ、嫌悪、嫉妬、驚き、喜怒哀楽、愛情、苦しみ、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他、実に様々な「欲望や感情」などがあるかと思う。そして、宗教の「修行」としては、それらの実に様々な「欲望や感情」などから開放されて、いわゆる「心の空（無）」を「獲得（体得）」することが、いわば一つの「到達点」になるかと思うが、われわれ人間の実に様々な「欲望や感情」（つまり「煩悩」）の中でも、何とも越え難いものとしては、まさに「二大本能」

としての「食欲と性欲」とがあり、その中でも「性欲」の山（峠）を乗り越えられなければ、いわゆる「心の空（無）」を真に「獲得（体得）」することは、でき難い。

例えば、釈迦においても、有名な菩提樹の下での最終段階の「瞑想」のなかで、いわゆる「三人の妖女」（それは「愛執と嫌悪と貪欲」）の誘惑を受けている。それだけわれわれ人間にとって「家族や女性への執着」や様々な「貪欲」（特に「食欲」や「金銭欲」その他）というものは、何とも越え難きものがあるということである。そして、『高野聖』の物語の中でも、最初は、実に様々な「ヘビや山蛭」（いわば「困難や苦難」）などに悩まされながらも、それらは、何とか越えられたとしても、しかし、最後の最後の段階における、何とも抗し難い「魅惑的な女性」（その「肉体」への執着）と甘い「誘惑」（「性欲」）をも退けて、今まで誰一人として「人間の姿」で、この「山」（峠）を越えられたものはなく、すべて何らかの「動物の姿」（例えば、馬、牛、猿、蟇蛙、蝙蝠、その他）などに変えられてしまったということである。

## 二、人間の二大欲

さて、「食欲」と「性欲」とは、われわれ人間の「二大本能」であり、しかも、「本能」というのは、まさに「一つの例外」もないということである。つまり、「食欲」のない人、また、「性欲」のない人というのは、ふつうであれば、この世の中に一人も存在しないということである。もちろん、「食欲」については、敢えてここで説明をするまでもなく、「食欲」が完全に消えるということは、すなわち、やがては「餓死」するということ以外何も意味しない。そして、「性欲」というのは、例えば、異性の存在が何とも抗しがたく魅力的に見えたりするのも、すべて「性欲」（つまり「本能」）の働きであり、逆に言えば、われわれ人間の「性欲」が限りなく「ゼロ」に近づいた時、――それは、例えば、男性の場合であれば、自分の中に溜まっていたものをすべて「射精」という形で出しきった状態の時には、この時、「性欲」というものは、限りなく「ゼロ」に近い状態となり、この限りなく「性欲」が「ゼロ」に近い状態にある時には、目の前にどれほど悩ましい「全裸の女性」がいたとしても、それは、何の魅力も「一かけら」も感じられない、まさにただの「肉のかたまり」に過ぎない存在になってしまうのである。――つまり、一気に「性欲」（その「熱病にうなされていたような状態」）は消え失せて、それは、「本能」（性欲）に全面的に支配されていた状態から、急転直下、まさに「知性や理性その他」などに支配されている「通常の状態」へと素早く戻ってしまうということである。

それでは、なぜ　そのような「仕組み」になっているのかと問えば、それは、本来、動物にとって「交尾」をしている状態というのは、まさに「無防備」そのものの状態であり、それは、まさに身を危険にさらしている状態である。つまり、襲いかかる敵は、常に身のまわりに数多く存在しているのであり、それゆえ、動物にとって長い「交尾」というのは、まさに「命取り」になりかねない行為であり、それゆえ、どのような動物でも、基本的には、「交尾」は短時間で行なわれるのがふつうである。それでは、なぜ、われわれ人間だけ、より長い「交尾」（つまり「セックス」）を望むのだろうか？　それは、まず、長い「セックス」をしていても、基本的には、まさに「身の安全」が確保されているからであり、逆に、「身の安全」が保証されていない場合は、おちおち長い「セックス」などしていら

れないということである。それに加えて、われわれ人間だけが、いわゆる「セックス」それ自体をできるだけ楽しもうとしているかと思う。

## 三、結び

それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、動物たちにとっての「交尾」というのは、本来、まさに「子孫保存欲」から生じているものであるが、人間だけが、恐らく、その「子孫保存欲」だけではなく、いわゆる「セックス」それ自体をできるだけ楽しもうとしているかと思う。それは、一体、なぜなのか？　それは、いわゆる「動物の段階」から、まさに「人間の段階」へと「進化（変化）」することによって、初めて、いわゆる「知性や理性」などが生じて来ることになるが、その「知性や理性」などの働きによってこそ、いわゆる「本能」だけから生じる「交尾」（それは「子孫保存欲」）から、まさに「本能（性欲）＋知性（知力）」の働きによって、初めて、いわゆる「セックス」をいろいろと楽しもうという意識が生じて来たということである。それは、何も「セックス」だけに限ったことではなく、もちろん、「食欲」にしても、いわゆる「本能（食欲）＋知性（知力）」の働きによってこそ、ただ単に目の前の「食べ物」をそのまま黙って食べるというのではなく、むしろ実に多彩（いろいろ）と「調理」をして、まさに「より食べやすく、また、より美味（おい）しい料理」にして食べているということである。むろん、それは、「食欲」や「性欲」だけの問題ではなく、もっと広い意味においては、いわゆる「知性や理性」（つまり「理知的部分」）の著しい発達によってこそ、われわれ人間というのは、今日のようなかなり高度な「文化や文明」などを築き上げて来たということである。

＊　＊

この峠
越すに越されぬ
女体（をんな）坂

変身

## 「変身」について

例えば、『変身』というカフカの有名な作品があるが、それは、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話である。もちろん、そのようなことは、現実には起こりようのないことではあるが、しかし、自分の「姿・形（すがたかたち）」が、ある日、突然、いわゆる「変身」するというようなことは、現実にはいくらでもあり得ることである。それは、いったいどういうことかと言えば、それは、次のようなことである。

例えば、ある日、交通事故に遭ったとする。しかも、それは、極めて深刻な交通事故であり、それゆえ、交通事故に遭った瞬間から、その人の意識は、まさに意識不明状態になってしまったとともに、生死にも直接かかわるような極めて深刻な傷を負ってしまったとする。その場合、通常、誰かの通報によって救急車が呼ばれ、その救急車に乗せられ病院に運ばれては、すぐにも「大手術」が何時間もかけて行なわれることになるかと思う。そして、その人が麻酔から覚めて、意識が戻った時には、その人は、まさにベットの上で寝ているような状態になるわけである。そして、自分が交通事故に遭ったことを想い出しては、それでは、自分の体は、いったいどうなったのかが気になり始め、そこで、どうなったのかを尋ねた時に、家族の誰かから、実は、これこれこういう事情で、一方の脚を切断しなければならなかったことや、実は、脊髄が損傷していて、歩けないので、これからは、車いす生活をしなければならないと告げられたとする。それは、その人にとっては、極めて「大きなショック」であり、それゆえ、最初は、うそだろうという感じで、到底受け入れ難い気持ちにもなるかと思う。

それは、カフカの『変身』という作品の、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話と、どこか共通するところがあり、それは、自分の「体」が、突然、良い方向ではなく、むしろ悪い方向へと「変身」してしまったということである。しかも、ここで最も大事なことは、例えば、化粧（メイク）や服装（ファッション）、その他などで自分をイメージチェンジして変えるのも、確かに「変身」ではあるが、しかし、そのような「変身」は、いつでも「元の状態」に戻れる変身であり、一方の、カフカの「変身」のように、二度と元に戻れない「変身」とは、根本的に違うものである。それに加えて、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、むしろその人の「体」が、「変身（変わって）」しまったということである。そして、その人の「体」が、悪い方向へと「変身」することによって、家族はともあれ、他人のその人を見る目も、大きく変化しやすいということである。つまり、自分の「心」そのものは、何も変わっていなくても、自分の「体」（つまり「姿・形（すがたかたち）」）が、悪い方向へと「変身（変わって）」しまっただけで、他人の自分を見る目が、大きく変化しやすいということである。

### 一、家族の目

まず、家族の問題から考えてみたいと思うが、家族にしてみれば、命が助かったということで、よかった、よかったということになるかと思う。もちろん、その気持ちにうそはないだろう。そして、入院生活も終わり、家に戻ってきて、今までと同じような生活を始めることになるかと思うが、しかし、今までと何から何まですべて同じということにはな

らないだろう。それでは、いったい何がどう変わるというのだろうか？　それは、まず、本人自身の気持ちの「変化」が生じ、そして、もう一つは、家族の気持ちの「変化」も生じて来るということである。そして、本人自身の気持ちの「変化」としては、当然のことながら、最初の頃は、どうしても事実を事実として受け入れ難く、それゆえ、荒れた気持ちにもなり、時には、家族にやつ当たりをしてみたりとか、また、時には、自分の部屋に閉じ籠もって絶望的な気持ちになったりするかと思うが、しかし、やがては事実は事実として受け入れざるを得ず、その結果として、前向きに生きていくことを考えるようになるということである。

一方、家族としては、そのように心を悩ましている姿を見ることは、非常につらいことであるとともに、できるだけ今まで通り自然体でサポートしていきたいと思うわけである。もちろん、それは、その時だけのことではなく、何年も何十年にも渡って、楽しい時もつらい時もあるかも知れないが、とにかく継続して行なうようになっていくということである。それは、祖父母を初めとして、家族の誰であれ、また、病気、介護、身体障害、その他、どのような場合でも、基本的には、すべて同じことになるかと思う。つまり、家族の場合には、その人の「姿・形（すがたかたち）」がどのように変化していこうとも、そういうこととはあまり関係なく、それ以前とそれほど大きく変わることなく、最後まで一緒に生きる（或いは面倒を見る）というような気持ちを持ち続けることになるかと思う。

## 二、他人の目

さて、問題は、他人の「自分を見る目」であるが、他人の「自分を見る目」というのは、自分の「姿・形（すがたかたち）」の変化とともに、他人の「自分を見る目」も変化しやすいということである。それは、いったい何を意味しているのかと言えば、それは、次のようなことである。

――つまり、われわれ人間というのは、どうしてもその人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めて見ているところがあるということである。それでは、なぜそのような見方をするのだろうか。それは、他人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などは、われわれの五感（つまり見たり聞いたりすること）を通して、それなりにはっきりととらえることができやすいからであり、一方、他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようがないからである。

つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などが深く眠っているとともに、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるということである。一方、われわれ人間というのは、他人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などのすべてを知りようもないので、その一人一人の他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようのない、まさに「ブラックボックス」状態であり、そ

れゆえ、その人が、何を思い、何を考えているかなどは、厳密にはなにひとつ分からないということである。

ところが、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるということである。そして、そのような傾向がはっきりとあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになるとともに、結局は、それによって、自分というものを少しでもよく見せようとすることにもなるわけだ。それでは、いわゆる「外的事実」とは、具体的には、いったいどういうものになるのかと問えば、それは、次のようなものになるということである。

つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々に表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」等である。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、いったいどういうものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということである。それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。

それでは、われわれ人間が、その人をほんとうに理解するためには、いったいどうしたらよいかと言えば、それは、大きな川を「下流から中流、中流から上流、そして、上流から源泉へと遡（さかのぼ）るようにすることである」が、それは、次のようになるかと思う。

まず最初は、その人の外に表れる様々な「外的事実」を、できるだけ厳密に「観察」（分析）することであるが、もちろん、それだけでは、不十分であり、それらを手かがりとして、今度は、その人の「心の中」に深く溶け入っては、自らその人となって、その人の「内的世界」を徹底的に生きてみることによってこそ、その人の「内的世界」の「表面的部分から中間的部分、中間的部分から深層的部分、そして、深層的部分から最も深奥にあるであろう『中心核』そのもの」へと理解を深めていくということである。

そして、その最も深奥にある「中心核」そのものこそは、まさにその人をその人たらしめている「精神的源泉」であり、その「精神的源泉」からこそ、その人なりの「思いや考え」などが絶えず生じて来るとともに、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、

また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」なども形成される、まさに「源泉」そのものになるということである。

## 三、あるがままの人間

さて、われわれ生身の人間というのは、本来、「良い面も悪い面もその他ありとあらゆる面」を同時に（潜在的に）持ち合わせているものであり、それゆえ、その人の置かれたその時々の状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、逆に、「悪い面」が現われたり、或いは、何かわけのわからない面が現われたりするということである、つまり、よい人は、いつも「よい人」であり、そして、悪い人は、いつも「悪い人」というようなことではなく、その人の置かれたその時々の状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、また、逆に、その人の「悪い面」が現われたり、あるいは、何かとんでもない面が現われたりするということである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要があり、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考えやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

例えば、社会的な地位もあり、また、思慮分別もあると思われていた人が、何か飛んでもないことをすると、われわれは、一応に驚いたりするが、しかし、その人がどういう職業に就いているからとか、ふだんは、こういう人だからということで、その人間を推し測ることはできないのである。というのも、われわれ生身の人間の「心の中」で蠢いている実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われるのではなく、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされた形で、外に現われてくるものだからである。

それゆえ、外に現われ出た「言動」だけを見て、あの人は、ああいう人と断定するわけにもいかないのである。――つまり、われわれ生身の人間の「心の中」には実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、絶えず現われたり、消えたりしている状態であるが、しかし、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされている状態であり、それゆえ、もしその人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には、（例えば、酒などを大量に飲んで、その人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には）、実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われやすくなるということである。

それでは、どちらがほんとうのその人なのか？　つまり、知性や理性などでコントロールされている「社会的自我」の時なのか？　それともコントロールが弱まり、様々な「欲望や感情」その他などに振りまわされている「利己的自我」の時なのか？　恐らく、それらに自分でも全く自覚できない「無意識の世界」などを加えたものが、まさに「その人」ということになるのだろう。

## 四、変身（表面的現象）

ところで、自分の「体」が、悪い方向ではなく、むしろ、良い方向へと「変身」するという場合もあるかと思う。例えば、有名な『みにくいアヒルの子』などは、まさにそのような童話であるが、その場合、みにくいアヒルの子は、その「姿・形（すがたかたち）」が、ほかの子供たちとは違っていたので、いろいろといじめられたりするわけだが、やがて、成長すると、いわゆる「白鳥の姿」へと大変身するという内容になっているかと思う。それは、いったいどういうことかと言えば、それをアヒルから人間の場合に置き換えて考えてみると、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、その人の「体」が「変身（変わった）」だけであるが、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などが、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。つまり、その人の「心」そのものは、何も変わっていなくても、その人の「体」（つまり「姿・形（すがたかたち）」）が、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。

つまり、「体」の「変身」は、その人の「見た目」、つまり、その人の「身体的特徴」（つまり「容姿・容貌」）の「変身」であり、そして、その人の「見た目」の「変身」というのは、われわれの「五感」ではっきりととらえることができ得るものであるのに対して、一方の、その人の「心」の「変心」のほうは、われわれの「五感」ではなかなかとらえにくいものであり、それゆえ、せいぜい「表面的特徴」（その時々に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」）などを知る程度であり、もっと奥にある「中間的部分」や「深層的部分」などは、本人が、うそ偽りなく、正直に告白しない限りは、なかなかとらえにくいものになるということである。

つまり、われわれ人間というのは、どうしても「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているようなところがあるが、しかし、そのような「表面的な現象」（つまり「見た目の感じ」）というのは、いわば「仮相」であり、「実相」そのものであるかどうかはよく分からず、それゆえ、物事の「仮相」ではない、もっと奥にある「実相」そのもの（つまり「真の姿（すがた）」）をとらえることが、何よりも大事なことになるが、それを実際に行なっているのが、まさに「思惟活動」（つまり「思考（思索）活動」）の一つの「大きな目的」でもあるわけだ。――つまり、言葉を換えれば、われわれ人間の「目」によってとらえられるものは、物事の「表面的な現象」に過ぎず、それは、絶えず変化して止（とど）まることのないものであり、それゆえ、まさに「仮相」（つまり「仮の姿（すがた）」）であるが、その「表面的な現象」のもっと奥にある物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることが、すなわち、「実相」（つまり「真の姿（すがた）」）をとらえるということであるとともに、それには、当然のことながら、それぞれ「個人差」があり、そして、真に「内的成長（成熟）」した「心の眼」によってこそ、初めて、どこまでも厳密にとらえることができ得るようになるということである。

一方、そうではない人たちというのは、どうしても「表面的な現象」などに意味なく振りまわされてしまい、もっと奥にある、いわゆる物事の「実相」（つまり「真の姿（すがた）」）をとらえるということは、なかなかできにくいとともに、その「表面的な現象」（つまりそ

の人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿（すがた）」（つまり「真実・真理」）だと思い込みやすいということである。

## 五、カフカの「変身」

ところで、カフカの『変身』という作品は、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという「内容」になるが、それは、例えば、今、世界中に蔓延している若者たちの、いわゆる「引きこもり現象」（自分の部屋の中に閉じ籠もって、外に出てこない、或いは外に出られないという「心理的状態」）を、まさに「象徴」的に表現していることにも、あるいはなるのかも知れない。――つまり、今までは何とか「社会」（俗世間）のなかで、活発に生きていた人が、現実の様々な「人間関係」の「あつれき」（摩擦）のなかで、実に様々に「傷つき、疲れ果て」て、次第に「心の活気や活力」などを失い、やがては、学校に行きたくても行けないような「登校拒否」、また、会社に行きたくても行けないような「出社拒否」、或いはまた、「社会」（人混み）のなかに出て行きたくても、出て行けないというような、そういう人間に「変身」してしまうという、まさに「引きこもり現象」（それは自分の「心の中」に閉じ籠もってしまうという現象）を、あるいは「象徴」的に表現していることになるのかも知れない。

もちろん、カフカの「変身」というのは、その人の「姿」が変わるのであり、それゆえ、いわゆる「心」が変わるというのではない。しかし、例えば、「体」が悪い方向へと変化するということは、その人の「心」もそのような方向へと変化しやすく、また、「心」が深く「悩み苦しむ」ようになれば、その人の「体」もそのような方向へと変化しやすくなるということで、それゆえ、われわれ人間の「体」と「心」というのは、決して「別々のもの」ではなく、むしろ、極めて「親密な関係」にあるということである。例えば、「体」が悪化したために、「外」に出られなくなるのと、「心」が悪化したために、「外」に出られなくなるのとでは、もちろん、最初の「動機」は違うとしても、しかし、長い間、独り「部屋」の中に閉じ籠もって、外にはあまり出なくなるような状態が長く続けば、やがては、ほとんど同じような「心理的状態」を生み出すことになるかと思う。それは、いったいどういうものかと問えば、それは、部屋の中にいる間は、その人は、「精神の安定や安心」などが得られているとともに、何か好きなことを行なっている時には、その人なりの「満足感や充実感」などを得ることもでき得る。しかし、「外」に出て行くのには、やはり不安がよぎり、人と会うのも、また、人と面と向かって話をするのも不安を感じてしまう。それは、なぜかと問えば、それは、結局、――自分が何らかの意味で「傷つく」ことになるのが不安（嫌）だし、また、他人を何らかの意味で「傷つけてしまう」ことになるのも、そのどちらも「嫌だ」という「心理」にどこか似ているということである。

一方、その人を取りまく「家族関係」というものにも、大きな「問題」が生じることになるが、カフカの「作品」のなかでは、例えば、母親は、息子の姿を見て、いわゆる「失神」をしてしまうが、それは、まさに母親の「失望感」の表れでもあるとともに、父親は、そのような息子に対して、リンゴの実を投げつけ、それが背中にめり込むことになるが、それは、まさに父親の「怒り」の象徴でもあり、そして、妹は、最初のうちは、兄の面倒をせっせと見ることになるが、それでも、最後には見放してしまう。それは、結局は、ま

さに妹の「諦めの気持ち」の表れでもあるということである。そして、毒虫に「変身」してしまった主人公は、自分の「気持ち」（真意）を家族に正確に伝えることもできず、（それは、虫の状態なので、言葉による「意思疎通」もうまくいかず）、結局は、お互い親しく話し合って「理解し合う」ということもできずに、主人公は、まさに孤独なまま「食事も摂らなくなり、死んでしまう」ということである。

## 六、対応の仕方

それでは、そのような場合、いったいどうしたらよいのかと問えば、それは、結局、段階を踏まえて「外」に出るしかない。もちろん、「外」に出れば、実に様々なことで「傷つく」ことになるだろうし、また、他人を「傷つけてしまう」こともあるかも知れない。しかし、それが、まさに「生きる」ということだと覚悟を決めて、「外」に出るしかない。そうすれば、自分が「傷つく」こともあるだろうが、また、「楽しい」こともあるかも知れない。また、人との交流をはじめ、様々な「助言や援助」その他などが得られることもあるかも知れない。そのようなところから、自分の「生きる場所」を見つけ出していくということである。――ただ、若い人たちのなかには、例えば、「生活保護」などの受給を受けて、それに甘んじて長々と「ぬるま湯」につかってしまう人も多いかと思うが、その場合、それが短期であれば、それほど問題はないだろうが、それが長期に渡るということであれば、それは、真に自分を「生かす道」ではなく、むしろ、自分を「殺すような道」であり、自分の「可能性」（潜在能力）を自ら放棄してしまうものである。というのも、それは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を積み重ねることによってこそ、初めて、その人の「可能性」（潜在能力）も引き出されて来るものであるとともに、その人の「人生（道）も、初めて開ける」ものであり、いわゆる「努力」を積み重ねることを怠って、長々と「ぬるま湯」につかっているだけでは、その人の「人生（道）は、永遠に開けない」ということである。それゆえ、何よりも大事なことは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を何年も積み重ねることであり、そのような「努力」を何年も積み重ねていくうちに、やがては「自分の人生（道）も、開けることになる」とともに、いわゆる自分が「心の中」に想い描くような、まさに「自分本来の人生」へと近づけていくことも、可能になるということである。

＊　＊

オスカー・ワイルドの世界

サロメ

サロメ

## はじめに

さて、今回の、オスカー・ワイルドの『サロメ』という作品は、非常に有名な作品であり、それゆえ、映画や舞台その他などで見聞きすることも多いかと思うが、しかし、文章で「一字一句」を丁寧に読み辿ることは意外と少ないのではないでしょうか。そこで、今回は、できるだけ「本文」に寄り添いながら、その「内容」を丁寧に読み辿ったものであり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

例えば、『新約聖書』の中にある「ヘロデとヨハネ」の「記述内容」によると、現王（ヘロデ）という人物は、異母兄弟の兄の「妻」（ヘロデヤ）をめとったが、そのことで、洗礼者ヨハネがヘロデに、「……兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったので、ヨハネを捕えて牢につないだことがあった。……王妃（ヘロデヤ）も、ヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、出来ないでいた。それは現王（ヘロデ）がヨハネを正しい聖なる人であると知って、彼を恐れ、また、保護を加えていたからである。

さて、現王（ヘロデ）の誕生祝いがあった時、王妃（ヘロデヤ）の娘（サロメ）が満座の中で舞を舞い、現王（ヘロデ）を喜ばせた。そのため現王（ヘロデ）は、娘に「……願うものは何でもやろう」と誓った。娘は、母の入れ知恵で、「……洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、今ここに頂きとうございます」と言った。王は非常に困ったが、それを与えるように命じ、人をやって牢でヨハネの首をはねさせた」という内容である。この『新約聖書』の中にある「ヘロデとヨハネ」の「記述内容」を参考にして、オスカー・ワイルドという劇作家は、彼独自の戯曲『サロメ』へと、その「内容」を大きく創り換えたものであり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成三十一年四月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

サロメ

はじめに

一、　マルコ伝の「ヘロデとヨハネ」
二、　マタイ伝の「ヘロデとヨハネ」
三、　主な登場人物たち
四、　戯曲『サロメ』の「内容」（あらすじ）
五、　饗宴（きょうえん）の間（ま）で騒がしい人聲（ひとごえ）
六、　王女（サロメ）の登場
七、　奴隷の登場
八、　預言者（ヨカナーン）の登場
九、　王女（サロメ）とヨカナーンとの会話
十、　若いシリア人（親衛隊長）の死
十一、現王（ヘロデ）と王妃（ヘロデヤ）の登場
十二、現王（ヘロデ）と王女（サロメ）
十三、現王と饗宴（きょうえん）のユダヤ人やナガレ人たち
十四、王妃（ヘロデヤ）とヨカナーンの声
十五、現王（ヘロデ）と王妃（ヘロデヤ）との会話
十六、現王（ヘロデ）と王女（サロメ）との会話
十七、奴隷たちが香料と七つのヴェールを運んで来る
十八、七つのヴェールの踊りとヨカナーンの首の要求
十九、現王（ヘロデ）の説得　その一
二十、現王（ヘロデ）の説得　その二
二一、現王（ヘロデ）の説得　その三
二二、現王（ヘロデ）の説得　その四
二三、現王の「斬首（ざんしゅ）」の許可
二四、サロメとヨカナーンの首との対話
二五、王女（サロメ）の「本心」（本音）
二六、最後の結末へ
二七、結び

※　参考文献

サロメ

サロメ

例えば、オスカー・ワイルドには『サロメ』という非常に有名な作品があるが、それは、いわゆる『新約聖書』の中にはっきりと記述されている、次のような「内容」から、あのような有名な「戯曲」が生み出されたということである。

一、マルコ伝の「ヘロデとヨハネ」

まず、「マルコ伝」の中にある記述では、次のような内容になっている。

さて、イエスの噂が高くなったので、現王（ヘロデ）の耳に入った。ある人々は、「……洗礼者ヨハネが死人の中から生き返ったのだ。だから、あのような力が彼（イエス）のうちに働いているのだ」と言い、他の人々は、「……彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は、「……（昔の）普通の預言者のような預言者だ」とも言っていた。現王（ヘロデ）は、これを聞いて、「……わたしが首を切ったあのヨハネが生き返ったのだ」と言った。

それにはこういう訳がある。――この現王（ヘロデ）は、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、そのことで、洗礼者ヨハネを捕えて牢につないだことがあった。それは、洗礼者ヨハネが現王（ヘロデ）に、「……兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」（つまり「兄の嫁と結婚するのは、近親相姦になる」）と言ったからである。……そのため、現王妃（ヘロデヤ）という人も、洗礼者ヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、出来ないでいた。それは、現王（ヘロデ）が洗礼者ヨハネを正しい聖なる人であると知って、彼を恐れ、また、保護を加えていたからである。――現王（ヘロデ）は、彼の教えを聞いて非常に当惑したが、それでも喜んで聞いていたのである。

すると、（王妃ヘロデヤにとって）よい機会が来た。現王（ヘロデ）は、自分の「誕生日の祝い」に、高官や将校やガリラヤの名士たちを招待して宴会を催した時、王妃（ヘロデヤ）の「娘」（サロメ）が席に出て舞を舞い、現王（ヘロデ）をはじめ、列座の人たちを喜ばせた。そこで王は少女に、「……ほしいものがあったら言ってみよ。褒美にやろう」と言い、さらに「……ほしければ、この国の半分でもあげよう」と誓った。そこで少女は座をはずして、母に「何をお願いしましょうか」と聞くと、母は、「……洗礼者ヨハネの首を」と答えた。すると、少女は急いで王のところに行って願った。「……今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、それを頂きとうございます」と。王は非常に困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、少女の願いを拒みたくはなかった。そこで、王はすぐに衛兵（首切役人）をつかわし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵（首切役人）は出て行き、獄中でヨハネの首を切り、盆にのせて持ってきて少女に与え、少女はそれを母に渡した。ヨハネの弟子たちはこれを聞くと、来てなきがらを引き取り、墓に納めた。（「マルコ伝」 **6:14-29**）

二、マタイ伝の「ヘロデとヨハネ」

一方、「マタイ伝」の中にある記述では、次のような内容になっている。

その頃、イエスの評判が領主（つまり現王「ヘロデ」）の耳に入り、彼は、家来に言った。「……それは、洗礼者ヨハネに違いない。あれが死人の中から生き返ったのだ。だから、あんな不思議な力が彼（イエス）の中に働いているのだ」と。それにはこういう訳があった。――現王（ヘロデ）は、前にその兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことから、洗礼者ヨハネを捕え、縛って牢に入れたことがあった。それは、洗礼者ヨハネが現王（ヘロデ）に、「……兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」（つまり「兄の嫁と結婚するのは、近親相姦になる」）と言ったからである。現王（ヘロデ）は、洗礼者ヨハネを殺したいと考えたが、民衆が予言者と思っていたので、彼らが騒ぎ出すのを恐れた。……

ところで、現王（ヘロデ）の誕生祝いがあった時、王妃（ヘロデヤ）の「娘」が満座の中で舞を舞い、現王（ヘロデ）を喜ばせた。そのため現王（ヘロデ）は、娘に「……願うものは何でもやろう」と、誓いを立てて約束した。娘は、母の入れ知恵で、「……洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、今ここに頂きとうございます」と言った。王は困ったが、列座の人たちの前で立てた誓いの手前、それを与えるように命じ、人をやって牢でヨハネの首をはねさせた。首は、盆にのせて持ってきて少女に渡され、少女は母に持っていった。ヨハネの弟子たちが来て、なきがらを引き取って葬り、行ってイエスに報告した。（「マタイ伝」14:1-12）

## 三、主な登場人物たち

さて、この「マルコ伝」や「マタイ伝」その他を参考にして、オスカー・ワイルドは、まさに『サロメ』という非常に有名な「戯曲」を書き上げることになるが、しかし、ここに記述されている「内容」が、そのまま戯曲『サロメ』の「内容」（筋書き）になっているということではない。それは、当然のことながら、オスカー・ワイルドという劇作家独自の戯曲『サロメ』へとその「内容」を大きく創り換えているのである。

＊　＊

まず、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の「登場人物たち」から見てみたいと思うが、最初は、「王妃」（ヘロデヤ）という女性であり、彼女は、ヨセフスの『ユダヤ古代誌』によると、「……ヘロデ大王の息子のヘロデ・ボエートス（聖書の記述では「ピリポ」という人）と結婚をし、サロメという娘一人をもうける。娘が生まれた後、これは、わが国の律法の相容れぬことであるが、娘を連れて、夫が存命であるにもかかわらず離婚をして、ヘロデ・アンティパスと結婚をした。……彼は、前王の異母兄弟であり、ガリラヤの四分封領主であった」とある。これは、そのまま「歴史的事実」になるかと思う。

一方、「現王」（ヘロデ・アンティパス）という人は、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の中では、「……（現王の）、ご兄弟・お兄上で、妃のヘロデヤさまの先の夫であられた方を、あそこ（牢獄＝古い井戸）に十二年も押しこめておいて、それでも死ななかったので、やむなく十二年目の終わりに縊り殺してしまった」とある。つまり、現王（ヘロデ・アンティパス）という人物は、「前王」（異母兄弟の兄）を「古い井戸」（つまり牢獄）に監禁をして、その「王位」と「妃」（ヘロデヤ）を手に入れていたのである。それを本文で見てみると、「……あなたでした。その人の腕から、私をお奪いになったのは」、

「……さよう。わたしのほうが強かったからな」と言うのであった。

しかも、「現王」（ヘロデ・アンティパス）は、連れ子の「娘」（サロメ）までも何とか手に入れようと「色目」で見ているという設定であり、それに対して、その「王妃」（ヘロデヤ）は、何度も、「……あの娘を見てはなりませぬ！　あなたはいつもあの娘ばかり見ておいでになる」と言うと、現王は、「……そなたはそのことばかり申しておるな」ということになるが、それは、「王妃」（ヘロデヤ）にしてみれば、自分の「夫」（ヘロデ・アンティパス）は、いつか自分の「娘」（サロメ）に手を出すのではないかと、そのことばかりを何よりも恐れていると同時に、自分の「娘」（サロメ）に自分の「夫」（ヘロデ・アンティパス）を奪われるかも知れないという「不安と嫉妬心」でもあるのである。一方、王女（サロメ）という少女は、いやらしい眼で見る「現王」（ヘロデ・アンティパス）、それは、「義父」でもあるが、強く「嫌悪している」という設定になっているのである。

＊　＊

さて、次は、「ヨカナーン」という人物であるが、この人物は、まさに「予言者」（ヨハネ）のことであるが、彼（ヨハネ）は、ヘロデに、「……兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったので、そのために、今や「牢獄」（古い井戸）に監禁されているという設定であり、しかも、「王妃」（ヘロデヤ）という人は、この「予言者」（ヨカナーン）を心の底から嫌っているのであり、それは、まさに「自分を近親相姦の淫らな女とばかり声高に非難している」からである。一方、「現王」（ヘロデ・アンティパス）という人は、その「予言者」（ヨカナーン）に対しては、次のような態度を取っているのである。

例えば、「王妃」（ヘロデヤ）という人が、「……予言者など信じませぬ。未来のことがだれにわかりましょう？　だれにもわかりはしませぬ。それに、あの男は、いつもわたくしの悪口雑言を申してばかりおります。でも、どうやらあなたはあの男を恐れておいでらしい……あの男を恐れておいでのことは、わたくし、ようく存じておりましてよ」、それに応えて、「……恐れてなどおらぬわい。ただのひとりも恐れてはおらぬぞ」、「……いいえ、恐れておられますとも。もし恐れておられなければ、半年も前から渡してくれとせがんでいるユダヤ人に、なぜあの男をお渡しなさいませぬ？」、「……その話ならもうよい。わたしの返事はすでにそのほうたちにも聞かせてある。あの男をそのほうたちの手に渡しとうはない。あれは聖者じゃ。神を見たことのある人間なのじゃ」と、むしろ「肯定的」（或いは「擁護的」）に見ているのである。これは、マルコ伝の「ヘロデとヨハネ」の「記述」に沿った「内容」であり、それは、「……王妃ヘロデヤは、ヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、出来ないでいた。それはヘロデがヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、また、保護を加えていたからである。ヘロデは彼の教えを聞いて非常に当惑したが、それでも喜んで聞いていたのである」という「記述」に沿ったものになっている。

一方、マタイ伝の「ヘロデとヨハネ」のほうの「記述」に依れば、むしろ、「……ヘロデは、ヨハネを殺したいと考えたが、民衆が予言者と思っていたので、彼らが騒ぎ出すのを恐れ」て、いわば「牢獄」に「監禁状態」にしていたのである。もちろん、「両者」（ヘロデもヘロデヤ）も、基本は「予言者」（ヨハネ）を嫌っているが、その「理由」は、まさに「……兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったからであり、そのために、今や「牢獄」に監禁されている状態であるが、その場合、「王妃」（ヘロデヤ）という人は、一貫して「……ヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、出来ないでいた。それはヘロ

デがヨハネを正しい聖なる人であると知って、彼を恐れ、また、保護を加えていたからである」とある。――つまり、「現王」（ヘロデ・アンティパス）という人は、ヨハネの「……兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」という言葉には激怒して、ヨハネを「牢獄」に監禁することになったが、しかし、一方、「現王」（ヘロデ・アンティパス）という人は、「……ヨハネを正しい聖なる人と知って」、若しも「彼」（ヨハネ）を殺害すれば、それこそ、わが身にどんな大変な「禍い」（不幸）が降りかかって来るやも知れぬと恐れて、（また、民衆が予言者と思っていたので、彼らが騒ぎ出すのも恐れて）、いわゆる「殺害」という方法ではなく、むしろ「監禁」という処置を取っているのである。

＊　＊

さて、オスカー・ワイルドという劇作家は、『新約聖書』の中にある「マルコ伝」や「マタイ伝」の「ヘロデとヨハネ」の「記述部分」その他を参考にしながら、まさに『サロメ』という非常に有名な「戯曲」を書き上げることになるが、しかし、『新約聖書』に記述されている「内容」が、そのまま戯曲『サロメ』の「内容」（筋書き）になっているということではない。それでは、一体、どこがどのように「違う」のかと問えば、それは、次のようなところである。――まず、『新約聖書』の中の「記述」では、「王妃」（ヘロデヤ）の実の「一人娘」である「サロメ」という王女は、現王（ヘロデ）の誕生祝いがあった時に、満座の中で舞を舞い、「現王」（ヘロデ）をはじめ、列座の人たちを喜ばせた。そこで王は少女に、「……ほしいものがあったら何でも言ってみよ」ということで、彼女は「母親」（ヘロデヤ）の言葉を受けて、有名な「……洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、今ここに頂きとうございます」という、まさに衝撃的な「言葉」を発する内容になっているのである。一方、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』では、そうではなく、むしろ「サロメ」自身が「預言者」（ヨカナーン）の「首を求める」という展開になっていくのである。

## 四、戯曲『サロメ』の「内容」（あらすじ）

さて、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の「内容」（あらすじ）というのは、次のようなものである。――まず、舞台は、「……饗宴の間よりも高くしつらえたヘロデの宮殿の広大なテラス。数名の兵士が露台（テラス）の欄干によりかかっている。右手に巨大な階段、左手、奥には、青銅製の緑色の囲いをめぐらせた古い井戸があり、月の光が（明るく）照らしている」という舞台設定になっている。この「舞台設定」は、最初から最後まで変わることなく、一度も「場面変更」の全くない舞台なのである。

＊　＊

まず、冒頭、「……こよいはなんとお美しいことだ。サロメ王女は！」と言って、最初に登場するのは、「若いシリア人」（親衛隊長）という人物であるが、この「若いシリア人」（親衛隊長）というのは、「現王」（ヘロデ）の話では、「……あれの父は国王であった。それをわしが攻めて国から追い出したのじゃ。そして、妃であったあれの母親を、そなたが奴隷にしたな、ヘロデヤ。それであの男は、いわば、客人としてここに来ていたわけで、だからこそあいつを隊長にしてやったのだ」とある。そして、この「若いシリア人」（親衛隊長）というのは、ひたすら「王女」（サロメ）だけを見ているとともに、彼

の「せりふ」のすべては、ひたすら「王女」（サロメ）のことだけに終始しているのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、「彼」（若いシリア人）というのは、「王女」（サロメ）に対して、はっきりと「恋心を抱いている」からである。

一方、次に登場の「ヘロデヤの小姓」という人物は、次のような「せりふ」から始まるものである。それは、「……見ろ、あの月を。不思議な月だな。どう見ても、墓から抜け出して来た女のよう。まるで死んだ女そっくり。屍をあさり歩く女のよう」だと言う。これは、実際の「月」（西洋では月を女神と見る）をいわば「死んだ女」として見ているのに対して、若いシリア人の方は、「……まったく不思議だな。小さな王女さながら、黄色いヴェールに、銀の足。まさに王女さながらの、その足が小さな白い鳩のよう……どう見ても、踊っているとしか思われぬ」とあるが、これは、実際の「月」を「王女」（サロメ）に模して見ているのであり、それに対して、「ヘロデヤの小姓」という人物は、「……見ろ、あの月を。不思議な月だな。どう見ても、墓から抜け出して来た女のよう。まるで死んだ女そっくり。屍をあさり歩く女のようだ。それがまたたいそうゆっくり動いている」と、「月」の「動きや様子」などをそのように見ていることになるが、これは、これから何か恐ろしい不吉なことが起こる「予兆」（予感）として描かれているのである。

ところで、一般に、「小姓」というのは、武将や貴人などの身近に仕えて、様々な「雑用や護衛」などを行なう武人（多くは少年）であり、例えば、織田信長の「森蘭丸」などは特に有名である。この「小姓」は、多くは「男色」であり、それゆえ、この「ヘロデヤの小姓」という人物も、ひたすら「若いシリア人」だけを見つめているのであり、それゆえ、ひたすら「王女」（サロメ）だけを見つめている「若いシリア人」に対して、はっきりと強い「嫉妬心」を燃やしているとともに、「……王女を見てばかりおられる。あんまり見ておられすぎる。そんな風にひとを見つめるとあぶない。なにか恐ろしいことが起るかも知れない」と言っているが、自分自身、ひたすら「若いシリア人」（親衛隊長）だけを見つめているのである。――ちなみに、この「ヘロデヤの小姓」というのは、オスカー・ワイルドの原作では「男性」であるが、一方、舞台などでは、むしろ「女性」が演じることが多いのではないかと思う。それは、なぜかと問えば、それは、やはり「同性愛」の問題が深く絡んで来るからであり、問題の少ない方を選んでいるのである。

## 五、饗宴の間で騒がしい人聲

さて、次に登場するのは、「第一の兵士」と「第二の兵士」それに「カパドシア人」という人物であり、この「三人」を中心とした「会話」になっていくが、まず、「第一の兵士」が、「……なんという騒ぎだ！　何者だ、あの吠え立てている野獣どもは！」と聞くと、「第二の兵士」は、「……ユダヤ人さ。いつもあゝさ。宗教のことさ、奴らの争いの種は」と言うので、「第一の兵士」は、「……どうしてまた宗教のことなどが争いの種になるのだ？」と聞くと、「第二の兵士」は、「……おれには解らぬ。いつものことさ。つまり、パリサイどもが天使は存在すると言う。すると、サドカイのほうでは、天使などいるものかとくるのだ」と言う。すると、「第一の兵士」は、「……どうも馬鹿らしい、そんなことに目くじら立てるなど」と言うのである。

一方、「若いシリア人」は、相変わらず、「……いかにも美しい、今夜の王女サロメは！」

と言うと、「ヘロデヤの小姓」も、「……さっきから王女ばかり見ている。あんまり見ておられすぎる。そんな風にひとを見つめるとあぶない。なにか恐ろしいことが起るかも知れない」と言うが、若いシリア人は、相変わらず、「……今夜はことのほか美しい」と言うのである。――一方、第一の兵士は、「……王は暗い顔をしておられる」と言い、第二の兵士も、「……うむ、暗い顔をしておられる」と言う。第一の兵士が、「……何かをじっと見ておいでだ」と言うと、第二の兵士も、「……誰かをじっと見ておいでだ」と言うので、第一の兵士は、「…… 誰を見ているのだろう」と言うと、第二の兵士は、「……おれには解らない」と応えるのである。（これはもちろん、王女《サロメ》を見ているのであるが）、若いシリア人は、「……王女のあの蒼ざめた顔！ あれほど蒼い顔をしているのを、おれはついぞ見たことがない。まるで銀の鏡に映る白薔薇の影のようだ」と言うと、ヘロデヤの小姓は、「……王女を見てはならぬ。あんまり見すぎている」と言うのである。

ちなみに、王女（サロメ）が「……蒼ざめた顔」をしているのは、王女（サロメ）にして見れば、現王（ヘロデ）の自分を「見る目」、それは、（娘を見る目ではなく）明らかにおかしいと敏感に感じているのである。

＊　＊

さて、饗宴の間では、王妃（ヘロデヤ）が現王の杯に酒をつがれるが、現王は酒には目がなく、三種類の葡萄酒を召し上がると、「三人」の会話からわかる。そして、「第一の兵士」が、「……ユダヤ人はな、目に見えない神をあがめておる」と言うと、カパドシア人は、「……わしにはとんと合点がいかん」と言い、また、「第一の兵士」は、「……事実、やつらの信じるのは目に見えぬものだけなのさ」と言うと、カパドシア人は、「……なんともばかげた話よ」となるのである。――すると、その時、突然、「ヨカナーンの声」がして、「……わたしのあとから、わたしよりも力あるかたが来られるであろう。わたしはそのかたの靴の紐をとくにも値せぬ者だ。そのかたが来られると、荒地も喜びにあふれであろう、百合のように花咲いて栄えるであろう。盲人の目は、日の光を仰ぎ、聾者の耳は、開かれるであろう。……」と叫ぶのである。すると、「第二の兵士」が、「……あいつを黙らせろ。いつもふざけたことばかりいってやがる」となるが、「第一の兵士」は、「……いや、ならぬ。あの方は聖者なのだ。それに、いたって優しい。毎日、食べものを運んでやると、そのたびに礼を言う」のだと言う。そして、カパドシア人が、「……何者なのだ？」と聞くと、「第一の兵士」は、「予言者だ」と答える。「……名前は？」と聞くと、「……ヨカナーン」と言う。「……どこから来たのか？」と聞くと、「第一の兵士」は、「……砂漠からだ、そこであの男は蝗と花の蜜を食って生きていた。駱駝の毛を衣に、腰には皮の帯を締めていた。その風貌は見るからに凄まじい。多くの人群れがいつもそのあとに随っている。あの男には弟子がいるのだ」と続くのである。そこで、カパドシア人が、「……会えるのか？」と聞くと、「第一の兵士」は、「……だめだ。王さまが禁じておられるのだ」と答えるのである。

＊

さて、ここまで読んだところでは、「第一の兵士」は、「宗教や神やヨカナーン」などに対しては、比較的「好意的である」のに対して、一方、残りの「二人」（第二の兵士とカパドシア人）の場合は、むしろ「宗教や神やヨカナーン」などに対しては、頭から否定的であるという、そういう「性格づけ」がなされているかと思う。そして、カパドシア人

が、（古井戸を指さして）、「……なんと奇妙な牢獄！」となるが、第二の兵士は、「……あれは昔、井戸だった」と言うと、カパドシア人は、「……昔、井戸だった！　きっと体に悪いだろうな」と言うので、第二の兵士は、「……なに、そうでもない。現に、今の王さまのご兄弟・お兄上で、妃のヘロデヤさまの先の夫であられた方を、あそこ（牢獄＝古い井戸）に十二年も押し込めていて、それでも死ななかったので、やむなく十二年めの終わりに首を絞めねばならなかった」と話すと、カパドシア人は、「……首を絞めた？　まただれがそんなことを？」となるが、第二の兵士は、（首斬役人の大男の黒人を指さして）、「……ほら、向うにいるあの男、ナーマンさ」となり、カパドシア人が、「……恐れもせずにか？」と聞くので、第二の兵士は、「……もちろん、王さまから指輪を頂いたからな」と答えると、カパドシア人は、「……なんの指輪だ？」と聞くので、「……死の指輪さ、恐れるわけがない」となる。つまり、王さまから直接「殺害の許可」が出されたので、それゆえ、「全然、恐れることはなかった」となるのである。

　すると、「若いシリア人」（親衛隊長）が、「……待て、王女がお立ちになる！　食卓をお離れになる！　いかにも悩ましげなそぶりだ。ああ、こちら（テラスの方）へ来られる。そうだ。われわれのほうへ。なんと蒼ざめた顔をして。あれほど蒼い顔をしているのをついぞ見たことがない……」と言うのである。

## 六、王女（サロメ）の登場

　さて、いよいよ女主人公（サロメ）の登場であるが、それは、次のような「せりふ」から始まるものである。つまり，「……あそこはいや。とても我慢できない。どうして王さまはあたしを見てばかりいるのだろう。目瞼を震わせ、もぐらのような目をして、母上の夫ともあろうかたが、あのような目で私を見るなんて！　どういう意味なのかしら、あたしにはわからない。……いいえ、ほんとうはわかっているの……」と言う。

　そして、「……ここの空気のすがすがしいこと！　ここなら息がつける！　あの連中ときたら、どうにもやりきれない。愚にもつかぬ儀式のことでどうのこうのと、互いにいがみ合ってばかりいるエルサレム生れのユダヤ人たち、浴びるほど酒を飲んでは、それをこぼして床の舗石を汚す野蛮人、目を隈どり頬を塗りたくり、むやみに髪の毛をちゞらせたスミルナ生れのギリシャ人。口数少なく狡猾で、硬玉のように爪を長くのばして、小豆色の外套を羽織っているエジプト人。それに、残忍で、がさつで、下種な言葉を平気で使うローマ人、ああ！　わたしは嫌い、ローマ人が！　そのくせ貴族ぶって……」とある。

　これは、現王（ヘロデ）の誕生祝いに、まさに高官や将校やガリラヤの名士たちが招待されて宴会が催されている状況を、まだ十六歳の少女であった王女（サロメ）の目から見ると、大人たちのいやらしい姿として見えているのである。一方、それに比べて、「……月を見るのはすてき！　小さな銀貨みたい。どう見ても、小さな銀の花。冷たくて浄らか。きっと生娘なのよ。生娘らしい美しさがある。そうとも、生娘なのよ。一度も身を汚したことのない。いちども男に肌を許したことのない、ほかの女神たちとは違って」と続くのである。すると、突然、「ヨカナーンの声」がして、「……主、来たりたまふ！　人の子は来たりたまふ。今や、半人半馬の怪獣どもは川底に身を隠し、人魚どもは川を去って、森の木陰に身をひそめている」と叫ぶ。これは、まさに「半人半獣」（つまり「半分

人間で半分獣(けもの)たち」）は、「主(しゅ)」（の罰）を怖れて、身をひそめているのである。すると、王女（サロメ）は、「……誰だい、いまの声は？」と聞くと、第二の兵士は、「……預言者でございます。王女さま」と答える。すると、王女（サロメ）は、「……ああ、あの預言者、王が恐れておいでの男だね？」と聞くので、「……それは存じませぬが、あれは預言者のヨカナーンでございます」と言う。「……あの男、母上のお身の上のことで、なにか不埒(ふらち)なことを言っているとか？」と聞くと、「……なんのことやら、やつの申しますことは、とんとわかりませぬ」と言う。「……そうなのだよ。母上のことでなにか不埒(ふらち)なことを言っているのだよ」と続くのである。

## 七、奴隷の登場

さて、奴隷が登場をして、「……王女さま、王さまのお言葉でございます。お席へお戻りくださいますように」と。すると、王女（サロメ）は、「……わたしは戻らない」と言い、若いシリア人は、「……畏(おそ)れながら、王女さま、お戻りなりませぬと、なにか禍(わざわ)いが起こるかもしれませぬ」と言う。王女（サロメ）は、「……年よりなの、その予言者は？」と聞くので、若いシリア人は、「……王女さま、お戻りになったほうがよろしゅうございます。どうぞ私のあとに」と対応するが、王女（サロメ）は、「……その予言者というのは……年よりなのかい？」と繰り返す。この「繰り返し」は、この戯曲『サロメ』には非常に数多く出て来るが、それは、王女（サロメ）の「意志の強さ」の表れの一つになるのかも知れない。それはともかく、第一の兵士が、「……いいえ、王女さま、まったくの若者で」と答えると、第二の兵士が、「……誰にもわかりはしない。あの男がエリアだという噂はあるようだが？」と言う。すると、王女（サロメ）は、「……誰のことだい、エリアというのは？」と聞くので、第二の兵士が、「……大昔、この国にいた預言者のことでございます、王女さま」と答える。そのあとで、奴隷が、「……王さまへは、なんとご返事申しあげればよろしゅうございましょうか？」と聞くのであった。

すると、再び、「ヨカナーンの声」が聞こえて来る。「……おまえたちを打ちすえた者の笞(むち)が折れたとて、パレスチナの民よ、喜ぶな。蛇(へび)の温めた卵から怪蛇(かいじゃ)（バジリスク）がかえり、それは、育ての親鳥を貪(むさぼ)り食らうであろうから」と叫ぶ。これは、「蛇(へび)」（淫らな両親）が「卵」（子供・サロメ）を育てると、「怪蛇(かいじゃ)」（バジリスク）となり、それが「親鳥」（両親をはじめ、国や民を滅ぼすことになる）という預言である。すると、王女（サロメ）は、「……なんと不思議な声だろう！　あの男と話がしてみたくなった」と言うが、第一の兵士は、「……それは叶(かな)わぬことでございましょう。王女さま、王さまは誰にもあの男と話をさせたくないのでございます。祭司(さいし)の長にさえお許しにならなかったほどです」と言うと、王女（サロメ）は、「……あの男と話がしたいのだ」と言う。第一の兵士は、「……それはかなわぬことでございます」とくり返すが、王女（サロメ）は、「……わたしはそうしたいのだ」と言い張る。若いシリア人も、「……宴の席にお戻りになるにしくはございませぬ」と対応するが、王女（サロメ）は、「……あの預言者をつれておいで」と言い張るばかりである。（奴隷退場）

次に、第一の兵士が、「……そればかりはなりませぬ、王女さま」と言うと、王女（サロメ）は、古井戸に近づき、中を覗き込む。「……なんと暗いのだろう。底のほうは！

さぞ気味の悪いことだろう。こんなに暗い穴のなかにいるなんて！　まるでお墓みたい。……（兵士たちに）聞こえないのかい？　あの男をここへ連れておいで。あたしは逢ってみたい」と言うが、当然のことながら、第二、第一の兵士ともに、「……そのご命令ばかりはお許しくださいませ、王女さま」と言うのである。

そこで、王女（サロメ）は、若いシリア人（親衛隊長）に目をつけ、「……お前なら、きっとしておくれだろうね、ナラボス。お前なら、きっとしておくれだろうね？　あたしはいつだってお前に優しくしてあげたもの。そうだろう。お前ならきっとしておくれだろうね？　一目でいい、あたしは会ってみたい。あの不思議な預言者に。みんなあの男の話ばかりしている。あたしは何度も耳にしているのだよ、王さまはあの男の話をするのを、どうやら、あの男を恐れておいでらしい、王さまは。そうとも、確かに恐れておいでなのだよ。……お前もそうなのかい、ナラボス、お前までも、あの男を恐れているのかい？」と聞くのである。……

すると、若いシリア人（親衛隊長）は、「……私は恐れません、王女さま。私は誰も恐れません。でも、王さまがこの蓋を上げることを堅く禁じておいでなのでございます」と答える。王女（サロメ）は、「……お前なら、きっとしておくれだろうよ、ナラボス、そうしたら、明日、神像売りの群れる城門の下を輿に乗って通るとき、お前の上に小さな花を投げてあげるよ、小さな緑の花を」と言うと、若いシリア人（親衛隊長）は、「……王女さま、私には出来ませぬ、とても出来ませぬ」と言うのである。そこで、王女（サロメ）は、微笑みながら、「……お前なら、きっとしておくれだろうよ、ナラボス、それがお前にはよくわかっているはず、お前ならきっとしておくれだろうよ。そうしたら、明日、神像買いの群れる橋の上を輿に乗って通るとき、きっとお前のほうを見てあげるよ。モスリンのヴェールの奥から、お前を見てあげるのだよ、ナラボス、笑ってあげるかもしれない、たぶん。……あたしをごらん、ナラボス、ごらん、あたしを。ああ、お前にはよくわかっているのではないかい？……あたしには、それがよくわかっているのだよ」と、いわば誘惑するのである。――これは、一体、どういうことかと問えば、王女（サロメ）という女性は、この若いシリア人（親衛隊長）がいつも自分のほうばかりを見ているのをはっきりと知っているということであり、しかも、さらに大事なことは、ふつうならば「隊長」と呼ぶところを、この場面では、わざわざ相手の「名前」を何度も親しそうに呼びかけるという高等な「技巧」を巧みに駆使しているのである。その結果として、若いシリア人（親衛隊長）は、第三の兵士に合図して、「……預言者を引き出せ……王女サロメさまがお会いになりたいといわれる」となっていくのである。

## 八、預言者（ヨカナーン）の登場

預言者が古井戸から出て来る。サロメ、それを見て、ゆっくりと後ずさりする。

さて、出てきたヨカナーンは、「……その男はどこにいる。手に瀆神の罪に満ちた盃を持てる男は？　どこにいるのだ。銀糸の衣をまとい、いつの日にか、衆人環視のなかに死に目をさらす男は？　その男に、ここへ来て聴けと言え、荒野に宮殿に叫びつづける者の声を聴け」と叫ぶ。すると、王女（サロメ）は、「……誰のことだい、あれは？」と聞

くと、若いシリア人は、「……わかりませぬ、王女さま」と言うが、むろん、それは、現王（ヘロデ）のことであり、つまり、「ヨカナーン」という人物は、まさに「預言者」であり、それゆえ、「現王」（ヘロデ）の将来を「預言している」という設定になっているのだろう。さらに、ヨカナーンは、「……その女はどこにいる、壁に描かれた男たちを、華やかに彩られたカルディアの男の絵姿を見、わが眼の淫欲に身をゆだね、カルディアへ使いを送りし女は？」と叫ぶ。すると、王女（サロメ）は、「……母上のことだね、あれは」と言うと、若いシリア人は、「……いえ、決して、王女さま」となるが、王女（サロメ）は、「……そうだよ、あれは母上のことなのだよ」と言う。すると、また、ヨカナーンは、「……その女はどこにいる、腰に飾り帯をつけ、頭に色とりどりの冠をかぶれるアッシリアの隊長どもに身を委ねし女は？　どこにいる、きめ美しき麻布とヒヤシンス石を身につけ、金の楯をもち、銀の兜をかぶれる逞しきエジプトの若者たちに身を委ねし女は？　行きて、その女を穢れし不倫の臥所より起こし、主の道を掃き清める者の言葉を聴けと言え、その罪を悔い改めよと。悔ゆる心なく、なお醜い所業に耽ろうとも、構いはせぬ、ここに来いと言え、裁きの杖は、今、主の御手にあるのだ」と叫ぶ。

王女（サロメ）は、「……それにしても、恐ろしい、なんて恐ろしい男だろう！」と言う。若いシリア人は、「……どうぞおひきを、王女さま、たってのお願いでございます」と言うが、王女（サロメ）は、「……あの眼が、わけても恐ろしい。それは、どう見ても、ティロスの壁掛を松明で燃え貫いた黒い穴。それはまた龍の棲む暗い洞窟、龍がそこに巣をつくるというエジプトの暗い洞窟のよう。どう見ても、気まぐれな月に掻き乱された暗い湖としか……あの男、まだ話すとお思いかい？」と聞くので、若いシリア人は、「……どうぞおひきを、王女さま！　お願いでございます、おひきあげを」と繰り返すが、一方、王女（サロメ）は、「……なんて痩せているのだろう！　ほっそりとした象牙の人形みたい。まるで銀の像のよう。きっと純潔なのだよ、月のように。その銀の光の矢さながら。あの男の肉は、きっと冷たいに違いない、象牙のように……あたしはあの男をもっと近くで見たい」と言う。若いシリア人は、「……いえ、なりませぬ、王女さま！」と言うが、王女（サロメ）は、「……あたしはあの男をもっと近くで見なければならない」と言う。すると、若いシリア人は、「……王女さま！　王女さま！」と言うばかりである。

## 九、王女（サロメ）とヨカナーンの会話

さて、戯曲『サロメ』の一つの見せ場でもある、まさに「サロメとヨカナーン」との直接的な「会話」になるが、それは最初、ヨカナーンが、「……この女は何者だ。おれを見ているのは？　見てはならぬ。隈どれる目蓋の下から金色の眼もて、なにゆえおれを見つめるのか？　何者か知らぬ。知りたいとも思わぬ。連れて行け。この女ではない、おれの話したいのは」と叫ぶ。すると、王女（サロメ）は、「……あたしはサロメだよ、ヘロデヤの娘、ユダヤの王女……」と言う。それを聞いて、ヨカナーンは、「……退れ！　バビロンの娘！　主に選ばれし者に近づいてはならぬ。お前の母は、その罪業の酒をもって地を浸したのだ。その悪名は神の耳にも届いているぞ」と叫ぶ。王女（サロメ）は、「……続けておくれ、ヨカナーン、お前の声は、あたしを酔わせる」と言い、若いシリア人は、「……王女さま！　王女さま！　王女さま！」と言うが、王女（サロメ）は、「……いい

から、続けておくれ。ヨカナーン、そして教えておくれ、あたしはどうしたらいいのか」と聞く。ヨカナーンは、「……近寄るな、ソドムの娘、その顔をヴェールにて覆い、頭に灰をふりかけ、行きて砂漠に人の子を求めるがいい」と叫ぶ。王女（サロメ）は、「……誰のことだい、人の子というのは？　その男もお前のようにきれいなのかい、ヨカナーン？」と聞くが、その「人の子」とは、もちろん、「イエス」のことである。すると、ヨカナーンは、「……退れ！　退れ！　おれには聞こえるぞ、この宮殿に死の天使の羽ばたく音が」と叫ぶ。これは、この宮殿に「死者」が出るぞと預言しているのである。すると、若いシリア人は、「……王女さま、どうぞお戻りを！」と言うが、ヨカナーンは、「……（主たる）神の天使よ、手に剣をもってここで何をなそうというのか？　この穢れし宮殿に何人を探し求めるのか？……あの男が銀の衣をまとうて死なねばならぬ日は、いまだ到来してはおらぬ」と叫ぶ。――あの男とは現王（ヘロデ）のことであり、やがては「神の罰」を受けて、衆人環視のなかで死に目をさらすことになるのである。

すると、王女（サロメ）は、「ヨカナーン！」と叫ぶと、ヨカナーンは、「……何者だ、今の声は？」と聞く。王女（サロメ）は、「……ヨカナーン！　あたしはお前の肌がほしくてたまらない。その肌の白いこと、一度も刈られたことのない野に咲き誇る百合のよう。山に降り敷いた曇のよう、ユダヤの山々に降り積り、やがてその谷間におりて来る曇のよう。アラビアの女王の庭に咲く薔薇でさえ、お前の肌のように白くはない。そう、アラビアの女王の庭に咲く薔薇だって、（香料を取る草花の咲き匂うアラビアの女王の庭だって）、曙の木々の葉に落ちる日脚（日差し）だって、大海原に抱かれる月の胸だって……お前の肌ほど白いものはどこにもありはしない――さあ、おまえの肌に触らせておくれ！」と言う。ヨカナーンは、「……退れ、バビロンの娘！　女こそ、この世に悪をもたらすもの。話しかけてはならぬ。聴きたくない。おれが耳をかたむけるのは、ただ神の御声のみだ」と告げるのである。

すると、王女（サロメ）は、「……お前の肌はいやらしい。レブラの肌のよう。蝮の這った泥の壁、蝮が巣をつくった泥の壁。それは白く塗った墓、なかは汚いもので一杯。気味が悪い、気味が悪いよ、お前の肌は！　……その髪の毛なのだよ、あたしがほしくてたまらないのは、ヨカナーン。お前の髪は葡萄の房、エドムの国のエドムの園に実った黒葡萄の房。それはレバノンの杉、獅子を隠し、昼をはばかる盗人たちをかくまうあのレバノンの大きな杉林。長い黒い夜、月が顔を隠し、星も恐れる夜だって、お前の髪ほどに黒くはない。森によどむ沈黙の影も、それほどに黒くない。どこにもありはしない、お前の髪ほど黒いものなんて……さあ、お前の髪に触らせておくれ」と言う。ヨカナーンは、「……退れ、ソドムの娘！　おれに手を触れてはならぬ、この神の宮居をけがすな」と叫ぶ。

すると、王女（サロメ）は、「……お前の髪の毛は気味がわるい。泥や埃にまみれている。どう見ても、その額においた茨の冠。どう見ても、その首に巻きついた黒い蛇。あたしはお前の髪の毛が嫌い。……その唇なのだよ、あたしがほしくてたまらないのは、ヨカナーン。お前の唇は象牙の塔に施した緋色の縞。象牙の刃を入れた柘榴の実。ティロスの庭に咲く、薔薇より赤い柘榴の花も、お前の唇ほど赤くはない。王のお著きを知らせ、敵の肝を冷やす、あの血なまぐさいラッパの一吹きも、そんなに赤くありはしない。お前の唇はもっと赤い、踏みつぶす葡萄の汁に濡れ輝く酒造り娘の足よりも、もっと赤いよ。祭司の撒いた餌を拾いながら神殿に遊ぶ鳩の足よりも。もっと赤いのだよ、獅子を殺

し、金色に輝く虎の群に会って、その森から出て来た男の足よりも。……お前の唇は、海の黄昏に漁師が見つけて、王様のためにと取り除けておく、あの珊瑚の枝のよう。……モアブ人たちがモアブの鉱山で掘り出し、王様がお買い上げになる朱のようだよ。朱を塗り珊瑚の弓筈をつけたペルシア王の弓のよう。どこにもありはしない。お前の唇ほど赤いものなんて……さあ、お前の口に口づけさせておくれ」と言う。すると、ヨカナーンは、「……触るな！　バビロンの娘！　ソドムの娘！　触ってはならぬ」と言うのであった。

＊　　＊

すると、王女（サロメ）は、「……あたしはお前の口に口づけするよ、ヨカナーン。あたしはお前に口づけする」と言う。すると、若いシリア人は、「……王女さま、王女さま、あなたはミルラの茂み、鳩の鳩、そのあなたが、見てはなりませぬ、この男をごらんになっては！　この男にそのようなことをおっしゃってはなりませぬ、耐えられませぬ……王女さま、王女さま、そのようなことをおっしゃってはなりませぬ」と言う。――これは、当然のことながら、一国の「王女」たるものが軽々しく言うべき言葉ではないとともに、王女（サロメ）だけをひたすら見つめている、この若いシリア人（親衛隊長）にとっては、その王女（サロメ）の眼がひたすら預言者（ヨカナーン）にだけ向けられていることに耐えられないということでもある。それに加えて、こういう結果を招いてしまった「責任と後悔」からも、「ああ！」という声とともに、若いシリア人（親衛隊長）は、自分を刺して、サロメとヨカナーンの間に倒れていくのである。

＊　　＊

すると、ヘロデヤの小姓は、「……シリアの若者は自殺してしまった！　若い隊長は自ら死んでしまった！　とうとう自殺してしまった。おれの友だちだったあの男は！　おれは小さな香料の箱と銀の耳飾りをやったことがある。その男は今自ら死んでしまったのだ！　ああ！　自分でもそう言っていたではないか、何か禍いが起こるだろうと？　おれもそう言った、そして、その通りになってしまったのだ。そうだ、おれには解っていたのだ、月が屍を求めていたことは、でも、おれにはわからなかった、まさかそれがこの男だとは。ああ！　なぜおれはこの男を月から隠してやらなかったのだ？　穴ぐらにでもかくまってやれば、見つからずにすんだろうに」と嘆く。すると、第一の兵士が、「……王女さま、若い隊長が自ら死にました」と告げると、王女（サロメ）は、ただ「……お前の口に口づけさせておくれ、ヨカナーン」と言うばかりである。ヨカナーンは、「……恐ろしいと思わないのか、ヘロデヤの娘？　おれはお前に言わなかったか、この宮殿に死の天使の羽ばたく音が聞こえると？　その天使はまだ来ぬとでもいうのか？」と言う。すると、王女（サロメ）は、「……お前の口に口づけさせておくれ」と言うばかり。ヨカナーンは、「……不義の子よ、世にお前を救い得る者はただ一人しかおらぬ。おれの言ったあの男だ。その男を探し求めるがいい。今、その男はガリラヤの海に舟を浮かべ、弟子たちと話を交わしている。岸辺に膝まづき、その名を呼ぶがいい。その男がお前のところへ来たとき、その男は必ず来よう、自分を呼び求める者のもとへは、そのとき、お前はその足もとにひれ伏し、罪の許しを乞うがいい」と言う。すると、王女（サロメ）は、「……お前の口に口づけさせておくれ」と言うばかりである。ヨカナーンは、終には「……呪いあれ、近親相姦の母より生れし娘、お前の上に呪いを！」と叫ぶのであった。王女（サロメ）は、それでも、「……あたしはお前に口づけする、ヨカナーン」と言うばかりで、ヨカナ

ーンは、最後には、「……おれはお前を見たくない。もう二度と見ぬぞ。お前は呪われているのだ。サロメ、お前は呪われているのだ」と言いながら、古井戸の中へと降りていくのであった。

## 十、若いシリア人（親衛隊長）の死

さて、第一の兵士は、「……死骸を移さねばならぬ。王は死骸がお嫌いだ、自分で殺した者のほかはな」と言う。一方、ヘロデヤの小姓は、「……あの男はおれの兄弟だった。そして兄弟よりも近いものだった。おれは香料を入れた小さな箱をやった。瑪瑙の指輪も、あの男はそれをいつも指にはめていたのに。夕暮れ時、よく川沿いに巴旦杏の木陰を一緒に歩いたものだった。そんな時、あの男は自分の国のことを話してくれた。いつも低い声でものを言う、その響きは笛吹きの笛のようだった。川面に映る自分の姿を見つめるのがたいそう好きだったな。おれは、よせと言ったのに」とある。まず、「川面に映る自分の姿を見るのが好き」とは、まさに「ナルシスト」であるとともに、この「よせ」は、当然、「王女」（サロメ）をひたすら見つめるということであり、それに対して、ヘロデヤの小姓は、最初の場面で、「……さっきから王女ばかり見ている。あんまり見すぎている。そんな風にひとを見つめるのはよくない。何か恐ろしいことが起こるかもしれない」と言っていたのである。――ところで、この「ヘロデヤの小姓」というのは、前にも触れたように、オスカー・ワイルドの原作では「男性」であるが、一方、舞台などでは、むしろ「女性」が演じることが多いかと思う。それは、なぜかと問えば、それは、やはり「同性愛」の問題が深く絡んで来るからであり、問題の少ない方を選んでいるのである。

そして、第二の兵士は、「……お前の言う通りだ、死骸を隠さねばならぬ。王の目に触れてはまずい」となる。すると、第一の兵士は、「……王はここまで来られはしまい。この高台には決してお出にならぬのだ。あの預言者をひどく恐れておいでだからな」とあるが、やがて、やって来るのである。それは、この高台には王女（サロメ）が居るからであり、それだけ「王女」（サロメ）への「思い入れ」がより強いということである。

## 十一、現王（ヘロデ）と王妃（ヘロデヤ）の登場

現王（ヘロデ）と王妃（ヘロデヤ）それに全従臣たちが登場する。

まず、現王（ヘロデ）は、「……どこにいる、サロメは？　王女はどこにいる？　なぜ席に戻らないのだ。あれほど言いおいたのに？　おお！　あそこに！」と、言うと、王妃（ヘロデヤ）は、「……あの娘を見てはなりませぬ。あなたはいつもあの娘ばかり見ておいでになる！」と言うが、一方、現王（ヘロデ）は、「……不思議な月だな、今宵の月は。そうであろう。不思議な月ではないか？　どう見ても、狂女だな、行くさきざき男を探し求めて歩く狂った女のような。それも、素肌のまま。一糸もまとうてはおらぬ。先ほどから曇が衣をかけようとしているのだが、月はそれを避けている。（われから中空に素肌をさらして）。酔うた女のように雲間を縫うて、よろめいて行く……きっと男を探し求めているのであろう……酔うた女の足どりのようではないか？　まるで狂女のようではない

か？」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……いいえ。月は月のよう、ただそれだけのことでございます。中へはいりましょう、ここにご用はないはず」と言う。

＊　　＊

これは、実に冷静な「見方」であり、例えば、「月」を見て、「ヘロデヤの小姓」は、「死んだ女」のようだと言い、「若いシリア人」は、「王女」（サロメ）のようだと言い、王女（サロメ）は、「生娘」のようだと言い、そして、現王（ヘロデ）は、「狂女」のようだと言う。つまり、「……月は月でしかない」ものであるが、人によってその「見方」が変わるのも、それは、まさにその人のその時々の「心の状態」の表れになるのである。

すると、現王（ヘロデ）は、「……おれはここにいる！　マナッセ、敷物をそこに。松明をともせ。象牙のテーブルを運べ、碧玉のテーブルもな。ここの空気はいい味がする。客人たちともっと酒を汲みかわしたい。ローマ帝国の使者には、能うかぎりのもてなしをせねばならぬ」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……そのためではございますまい、ここをお動きにならぬのは」と言う。（それは、もちろん、サロメがいるからであるが）。すると、現王（ヘロデ）は、「……うむ、ここの空気はいい味がするからな。さあ、ヘロデヤ、客人がお待ちかねだ。おお！　足が滑った！　血に足が滑った！　不吉な前ぶれだぞ。世にも不吉な前ぶれだぞ。なぜ、ここに血があるのだ？　……それに死骸も？　どうしてここに死骸があるのだ？　このおれをなんと思うているのか、客のもてなしに死骸を見せねば気のすまぬあのエジプト王よろしくの人間とでも思うているのか？　それにしても、これは何者だ？　このようなものは、おれは見とうないぞ」と言う。すると、第一の兵士が、「……私どもの隊長でございます。王さま、シリアの若者で、王さまが三日前に隊長にお命じになったばかりの男でございます」と告げるのである。

すると、現王（ヘロデ）は、「……おれは殺せと命じはしなかったぞ」と言う。第二の兵士は、「……自ら死んだのでございます、王さま」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……どうしてだ？　おれは隊長にしてやったのだ！」と言うと、第二の兵士は、「……存じませぬ、王さま。いずれにせよ、自ら死んだのでございます」と言う。現王（ヘロデ）は、「……おれには解らぬ。自分で死ぬのは、ローマの哲人だけと思うていたが。そうではないか、ティゲリヌス、ローマの哲人は自ら死ぬるというではないか？」と言うと、ティゲリヌス（若いローマ人）は、「……なかには自ら死ぬものもございます。王さま。それはストア派の輩にございます。ストア派と申しますのは、全くの田舎者にございます。とにかく、全く度しがたい輩でございます。私などの眼には、ただもう度しがたい輩としか見えませぬ」と言う。現王（ヘロデ）は、「……おれもそう思うな。自ら死ぬるなどとは、度しがたい奴等だ」と言う。すると、ティゲリヌス（若いローマ人）は、「……ローマでは物笑いの種にございます。皇帝ご自身、その連中を揶揄した詩をお作りになりました。それが国中で歌われております」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……おお！　奴等を揶揄した詩を作られたというのか？　ローマ皇帝はさすがだな、なんでもお出来になる。……それにしても、訳がわからぬ。シリアの若者が自ら死んだというのは。惜しいな。そうだ、惜しいことをした。いい男だったからな。いかにもいい男だった。眼に深い憂いがあったな。おれは憶えているぞ、この男は憂いを含んだ眼なざしで、じっとサロメを見つめていた。実は、少し度が過ぎると思うていたのだ」と言うのである。

すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……あの娘を見すぎる人はほかにもおりましょう」と

言うが、話をそらして、現王（ヘロデ）は、「……あれの父は国王であった。それをわしが攻めて国から追い出したのじゃ。そして、妃であったあれの母親を、そなたが奴隷にしたな、ヘロデヤ。それであの男は、いわば、客人としてここに来ていたわけで、だからこそあいつを隊長にしてやったのだ。それを死なせたとは惜しい。それにしても、なぜ死骸をこのままにしておくのだ？　どこかへかたづけねばならぬ。おれは見とうない。かたづけろ！（死骸が運び去られる）。ここは冷たい。風が吹く。風が吹いているのではないか？」と聞く。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……いいえ。風など吹いてはおりませぬ」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……いや、確かに風が吹いている。それに、なにか空に羽ばたくような音が聞こえる、途方もなく大きな翼の羽ばたくような音が、お前にはあれが聞こえぬか？」と聞く。（これはもちろん、まさに「死の天使」の羽ばたく音である）。そして、王妃（ヘロデヤ）は、「……いえ、なにも」と答える。――つまり、現王（ヘロデ）には聞こえて、王妃（ヘロデヤ）には聞こえない。それは、まさに「幻聴」であるが、その「幻聴」は、例えば、「……この宮殿に死の天使の羽ばたく音が聞こえないか」と言った「預言者」（ヨカナーン）の「預言」（それは若いシリア人をはじめ、次は「預言者自らの死とサロメの死」が）、まさに現実化しようとしているのである。そして、現王（ヘロデ）は、「……もう聞こえぬ、おれにも。が、確かに聞いたのだ。間違いない、風が吹いていたのだ。もうやんでしまったが。いや、また聞こえてくる。あれがお前には聞こえぬのか？　確かに何か羽ばたくような音だったぞ」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……何も聞こえなどいたしませぬ。王にはどこかお加減が悪いだけのこと。さ、中へ入りましょう」と言うが、現王（ヘロデ）は、「……おれはどこも悪くない。悪いのはお前の娘だ。まるで病人のようだ。あれほど蒼い顔をしているのを、おれはついぞ見たことがない」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……あれをごらんにならぬようにと申しあげたではございませぬか」と言うのであった。

## 十二、現王（ヘロデ）と王女（サロメ）

さて、今度は、「ヘロデとサロメ」との直接的な「会話」になるが、それは、次のようなものである。まず、現王（ヘロデ）は、「……酒を注げ。（酒が運ばれる）、サロメ、ここへ来て、少しおれと飲め。特別にうまい酒だぞ。ローマ皇帝が直々に送ってくれたのだ。その小さな赤い唇を一口つけてくれぬか、あとはおれがほしてやる」と言うと、王女（サロメ）は、「……今は、のどが渇いてはおりませぬ、王さま」と言うのであった。すると、現王（ヘロデ）は、「……聞くがいい、あの返事を、お前の娘の言いぐさを」となり、王妃（ヘロデヤ）は、「……さすがは私の娘、当然のことと存じます。なぜ、そうあればかりごらんなさいます？」と聞くので、現王（ヘロデ）は、「……木の実を持って来い。（果物が運ばれる）、サロメ、ここへ来て木の実を食べるがよい。その小さな歯の痕が見たいのだ。ほんの一口でいい、この木の実を嚙れ、残りはおれが食べてやる」と言うと、王女（サロメ）は、「……今は、なにも食べとうはございませんぬ、王さま」と言うのであった。すると、現王（ヘロデ）は、「……見ろ、よく躾けたな、娘を」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……娘と私は、王族の出でございます。でも、あなたは、おじいさまが驢馬の番人だったとか！　それに、盗人でもあったとやら！」と言うと、現王（ヘロデ）は、

「……出まかせをいうな！」と怒るが、王妃（ヘロデヤ）は、「……よく御存じのはず、それは本当でございます」と言うのである。すると、今度は、現王（ヘロデ）は、「……サロメ、ここへ来ておれのそばに座るがいい。お前の母の椅子を与えよう」と言う。王女（サロメ）は、「……今は、疲れておりませぬ、王さま」と答える。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……もうおわかりのはず、あれがあなたをどう思うているか」と言うのであった。

＊　　＊

さて、この「場面」は、非常に興味深い「場面」であり、それは、次のようなことである。――つまり、預言者（ヨカナーン）と王女（サロメ）との直接的な「会話」の場合には、王女（サロメ）は、預言者（ヨカナーン）に向かって、「……わたしはお前の白い肌がほしくてならない。お前の白い肌に触らせておくれ」と頼むと、預言者（ヨカナーン）は、「……退れ、バビロンの娘！　女こそ、この世に悪をもたらすもの。話しかけてはならぬ。聴きたくない。おれが耳をかたむけるのは、ただ神の御声のみだ」と強く拒絶されてしまう。すると、また、王女（サロメ）は、預言者（ヨカナーン）に向かって、今度は「……わたしはお前の黒い髪がほしくてならない。お前の黒い髪に触らせておくれ」と言うと、預言者（ヨカナーン）は、「……退れ、ソドムの娘！　おれに手を触れてはならぬ、この神の宮居をけがすな」と、再び、強く拒絶されてしまう。すると、三たび、王女（サロメ）は、預言者（ヨカナーン）に向かって、「……わたしはお前の真っ赤な唇がほしくてならない。お前の真っ赤な唇に口づけさせておくれ」と頼むと、預言者（ヨカナーン）は、「……触るな！　バビロンの娘！　ソドムの娘！　触ってはならぬ」と、三たび、強く拒絶されてしまうが、さらに、続けて、王女（サロメ）は、預言者（ヨカナーン）に向かって、「……お前の口に口づけさせておくれ」と何度も頼むのであった。すると、預言者（ヨカナーン）は、「……不義の子よ、世にお前を救い得る者はただ一人しかおらぬ。おれの言ったあの男だ。その男を探し求めるがいい。今、その男はガリラヤの海に舟を浮かべ、弟子たちと話を交わしている。岸辺に膝まづき、その名を呼ぶがいい。その男がお前のところへ来たとき、その男は必ず来よう、自分を呼び求める者のもとへは、そのとき、お前はその足もとにひれ伏し、罪の許しを乞うがいい」と言う。すると、王女（サロメ）は、「……お前の口に口づけさせておくれ」と言うばかり。預言者（ヨカナーン）は、終には「……呪いあれ、近親相姦の母より生れし娘、お前の上に呪いを！」と叫ぶのであった。それでも、「……あたしはお前に口づけする、ヨカナーン」と言うサロメに向かって、最後には、「……おれはお前を見たくない。もう二度と見ぬぞ。お前は呪われているのだ。サロメ、お前は呪われているのだ」と言いながら、古井戸の中へと降りていくのである。

つまり、王女（サロメ）は、預言者（ヨカナーン）からは、まさに「全面的に拒絶」されてしまうのである。もちろん、これは「創作」（フィクション）であり、それゆえ、実際は、預言者（ヨハネ）と王女（サロメ）との直接的な「会話」など、一かけらもないというのが、まさに「歴史的事実」であるが、しかし、このような所にこそ、その「作者」（オスカー・ワイルド）という人物の「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが表に表れやすいとともに、オスカー・ワイルドという人物は、いわば「同性愛者」であったので、どうしても「……女性に対しては非常に厳しく、批判的である一面がよく表れている」ということである。

＊　　＊

一方、今度は、現王（ヘロデ）と王女（サロメ）との直接的な「会話」の場面であるが、まず、現王（ヘロデ）は、王女（サロメ）に向かって、「……サロメ、ここへ来て、少しおれと飲め。特別にうまい酒だぞ。ローマ皇帝が直々に送ってくれたのだ。その小さな赤い唇を一口つけてくれぬか、あとはおれがほしてやる」と言うと、王女（サロメ）は、「……今は、のどが渇いてはおりませぬ、王さま」と言うのであった。すると、また、現王（ヘロデ）は、王女（サロメ）に向かって、今度は「……サロメ、ここへ来て木の実を食べるがよい。その小さな歯の痕がみたいのだ。ほんの一口でいい、この木の実を囓れ、残りはおれが食べてやる」と言うと、王女（サロメ）は、「……今は、なにも食べとうはございませんぬ、王さま」と言うのであった。すると、三たび、現王（ヘロデ）は、王女（サロメ）に向かって、「……サロメ、ここへ来ておれのそばに座るがいい。お前の母の椅子を与えよう」と言うと、王女（サロメ）は、「……今は、疲れておりませぬ、王さま」と言うのであった。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……もうおわかりのはず、あれがあなたをどう思うているか」と言うのであった。……つまり、ここまでは、現王（ヘロデ）は、王女（サロメ）からは、まさに「全面的に拒絶」されてしまうのである。

むろん、最後の最後には、現王（ヘロデ）の、「……サロメ、頼む、おれに踊りを見せてくれ、踊ってくれたら、なんなりとほしいものをつかわそう。たとえこの国の半分と言われようと」と言うので、王女（サロメ）は、「……本当に、ほしいものはなんでも、王さま？」と確かめ、そして、現王（ヘロデ）に誓いを立てさせてから、王女（サロメ）は、終に踊ることになるが、それは、その王女（サロメ）の奴隷たちが持って来た「香料と七つのヴェール」とを身に付けてから、王女（サロメ）は、あまりにも有名な「七つのヴェールの踊り」を素足で踊るという、まさに「最高潮」（クライマックス）へと向かっていくわけだが、その前に、まだ次のような幾つかの「場面」が続いて行くのである。

## 十三　現王と饗宴のユダヤ人やナガレ人たち

さて、現王（ヘロデ）は、王女（サロメ）から「三たび」断られたので、また、「……持ってこい……なんだったかな。わしのほしかったのは？　忘れた。そう！　そう！　思い出した……」となるが、その時、突然、「ヨカナーンの声」が聞こえて来る。「……見よ、時は来たのだ！　わが預言せしこと起りぬ、と主たる神は仰せられる。見よ！　ついに訪れたのだ。わしの語っていたその日が」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……あの男を黙らせて、あれの声は聞きとうない。あの男はたえずわたしの悪口ばかりいうている」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……そなたに悪いことなどなにもいうてはおらぬ。それに、あの男は偉大な預言者なのだ」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……予言者など信じませぬ。未来のことがだれにわかりましょう？　だれにもわかりはしませぬ。それに、あの男は、いつもわたくしの悪口雑言を申してばかりおります。でも、どうやらあなたはあの男を恐れておいでらしい……あの男を恐れておいでのことは、わたくし、ようく存じておりましてよ」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……おれはあの男を恐れてなどおらぬ。おれはだれも恐れはせぬぞ」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……いいえ、恐れておられますとも。もし恐れておられなければ、半年も前から渡

してくれとせがんでいるユダヤ人に、なぜあの男をお渡しなさいませぬ？」と言う。現王（ヘロデ）は、「……その話ならもうよい。わたしの返事はすでにそのほうたちにも聞かせてある。あの男をそのほうたちの手に渡しとうはない。あれは聖者じゃ。神を見たことのある人間なのじゃ」と言うのである。

すると、第一のユダヤ人は、「……いいえ、ありえぬことでございます。かの預言者エリアこのかた、神を見たものはひとりもありませぬ。エリアこそ、神を見た最後のもの。それに、今の世に神はもう姿をお現しなどなさいませぬ。神は隠れておいでなのです。さればこそ、この国に大きな禍（わざわ）いが生じているのでございます」と言う。すると、第二のユダヤ人は、「……そもそも、預言者エリアが神を見たかどうか、それすら誰にもわかりはせぬ。見たのは、あるいは神の幻だったかもしれないからな」と言う。また、第三のユダヤ人は、「……神が隠れるなどということがそもそもありえない。神はいつでも姿を現しておいでだ、しかも、あらゆるもののなかにな。神は悪しきもののなかにもいる、善きものと同じにな」と言う。第四のユダヤ人は、「……そんなことを言うものではない。それこそ危険この上ない邪説だ。アレクサンドリアの学者たちが言い出したことだが、あそこでは専らギリシアの哲学がはやる。そのギリシア人というやつ、もともと異教徒だからな。割礼もしないときている」と言う。そして、第五のユダヤ人は、「……神の御業（みわざ）は誰にも解りはせぬ、全く計り知れぬものがあるからな。みんなが悪いということが善で、みんなが善いということが悪かもしれぬ。人間に何が解るものかよ。肝腎なのは、ただ黙ってあとについて行くことだ。神は強いからだ。その前には弱い者も強い者もありはせぬ。みんな片っ端から打ちのめされてしまうのだ。神は人間のことなど歯牙（しが）にもかけてはおられぬのさ」と言う。すると、第一のユダヤ人は、「……全くそのとおりだ。神は恐ろしい。弱いも強いも一緒くたん、挽き臼（うす）の中の穀物同然、みんな打ちのめされてしまうのだ。だが、あの男が神を見たわけがない。神を見た者は預言者エリア以来ひとりもいないのだ」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……あの連中を黙らせて、本当にうんざりする」と言うのであった。――つまり、この「場面」は、神や預言者について、第一から第五のユダヤ人たちがそれぞれ自分勝手な意見を述べているところであるが、人それぞれみな「意見や考え方」などは千差万別で、それぞれみな違って来るものであり、みながみな同じ「意見や考え方」などということは永遠にあり得ないのである。

＊　＊

さて、現王（ヘロデ）は、「……だが、ヨカナーンこそ、その預言者エリアだという話をきいたぞ」と言う。すると、第一のユダヤ人は、「……そんなはずはありませぬ。エリアの時代と言えば、三百年以上も昔のことでございます」と言うので、現王（ヘロデ）は、「……あの男（イエス）が、その預言者エリアだという者もいるぞ」と言う。すると、ナガレ人は、「……いや、たしかに、あの男こそ預言者エリアでございます」と言う。すると、第一のユダヤ人は、「……いや、違う、あの男は預言者エリアではない」と言う。すると、突然、「ヨカナーンの声」が聞こえて来る。「……ついにその日は来た。主来たりたまふ日が来たのだ、おれには聞こえる、世の救い主となる者の歩みが山々に響き渡るのが」と叫ぶ。現王（ヘロデ）は、「……なんのことだ、今のは？　あの救い主というのは？」と聞くと、若いローマ人（ティゲリヌス）は、「……ローマ皇帝がお用（もち）いになる称号にございます」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……しかし、皇帝がユダヤに来られ

るわけがない。きのうはローマから手紙が届いた。が、どれにもそんなことは書いてなかったぞ。それにティグリヌス、お前は冬中ローマにいたわけだが、そのことについて何も聞いてはいまい？」と言う。若いローマ人（ティゲリヌス）は、「……はい、王さま、何も聞いてはおりませぬ。私はただ称号のことを御説明申し上げただけのこと。あれは、皇帝の称号の一つなのでございます」と言う。現王（ヘロデ）は、「……まさか、皇帝はおいでになれまい。痛風を病んでおられるからな。脚はさながら象のそれのようとか。それに国務も多々おありになること。ローマを離れる者はローマを失う。おいでにはなるまい。しかし、いずれにせよ、この世の主だ、ローマ皇帝ともなればな。お望みとあらば、いつでも来られよう。が、まさかおいでにはなるまい」と言うのであった。――この「場面」は、ヨカナーンの「救い主」という言葉を、若いローマ人（ティゲリヌス）は、ローマ皇帝が用いる称号の一つだと「誤った説明」をする場面であり、この「場面」は、それほど重要ではなく、それゆえ、多くの場合、映画や舞台などでは省略されることも多いのではないかと思う。それでは、なぜ、オスカー・ワイルドは、この場面を書いたのかという問題が生じるが、それは、恐らく、その当時のローマ帝国やそのローマ皇帝の存在の大きさなどを時代背景として書き記しておきたかったのかも知れない。

＊　　＊

次に、第一のナザレ人は、「……違います、あの預言者が申しましたのは、ローマ皇帝のことではありませぬ、王さま」と言う。現王（ヘロデ）は、「……ローマ皇帝のことではない？」と、第一のナザレ人は、「……さようではございませぬ、王さま」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……では、誰のことだ、あれの言うのは？」と聞くと、第一のナザレ人は、「……この世に来たりたまうたメシアのことです」と言う。すると、第一のユダヤ人は、「……まだメシアは来るものか」と言う。第一のナザレ人は、「……すでに来たりたまうたのだ、現に至るところで奇跡を行なうている」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……ああ！　ああ！　奇跡ですって！　奇跡など私は信じませぬ。嫌というほど見せつけられてきたのだもの。（小姓に）、さあ、私の扇を」と言うと、第一のナザレ人は、「……その男は本当に奇跡を行なうのでございます。例えば、ガリラヤという小そうはございますが、ちょっとした町で起りましたこと、ある婚礼の席上、その男は水を酒に変えました。そこに居合わせたものからこの耳で直接聞いた話でございます。それにまた、カペナウムの門前に座っていた癩病やみを二人、ただ手を触れただけで癒したのでございます」と言う。すると、第二のナザレ人は、「……いや、そのカペナウムの二人は盲人だった」と言う。ナガレ人は、「……いや、癩病やみだ。もっとも盲人も癒している。そればかりか、その男が山の上で天使たちと話をしているのを見た者もございます」と言う。サドカイ人は、「……天使などいるものか」と言う。パリサイ人は、「……天使はいよう、が、それと話をしていたなどということは、信じられない」と言う。すると、第一のナガレ人は、「……その話をしているところを大勢が見ていたのだ」と言うと、サドカイ人は、「……相手は天使ではなかったのさ」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……ああ、いらいらする、この連中ときたら！　正気の沙汰とは思えない。（小姓に）、さあ！　私の扇を。（小姓が扇を渡す）、お前の顔はまるで夢でも見ているよう。夢など見るものではない。夢を見るのは病人だけなのだよ」と言って、扇で小姓を叩くのであった。

さて、この「場面」は、ヨカナーンの「救い主」という言葉は、実は、「メシア」のこ

とであり、その「メシア」（救い主）は、実は「イエス」のことであり、その「イエス」は、様々な「奇跡」を実際に起しているという話を実例を挙げて話をしている場面であるが、これは、劇作家（オスカー・ワイルド）にとっても、この場面は、「サロメ」と「ヨカナーン」（ヨハネ）、「ヨハネ」と「イエス」とは切っても切れない関係であり、それゆえ、「イエス」についても一通りは書いておきたかったということである。

＊　＊

さて、次の第二のナザレ人は、「……それと、ジャイールの娘の奇跡がある」と言う。すると、第一のナザレ人も、「……そうだ、あれこれ確かなものだ。誰にも否定は出来まい」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……みんな気が狂うている。あまり長いこと月を見過ぎたせいでございましょう。黙るようにお命じくださいまし」と言う。現王（ヘロデ）は、「……どういうことなのだ、そのジャイールの娘の奇跡というのは？」と聞くと、第一のナザレ人は、「……ジャイールの娘は死にました。それをその男は生き還らせたのでございます」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……死人を生き還らせるというのか？」と聞くと、第一のナザレ人は、「……はい、王さま、死人を生き還らせるのでございます」と答える。現王（ヘロデ）は、「……そんなことはしてもらいたくないぞ。おれは禁ずる。死人を生き還らせることなど、おれは許さぬ。その男を探し出し、きつく言っておかねばならぬ。死人を生き還らせることなど、おれが許さぬとな。今どこにいるのだ、その男は？」と聞くと、第二のナザレ人は、「……どこにでもおります。王さま、ただ、あの男を探し出すのはたいそう難しゅうございます」と言うと、第一のナザレ人は、「……聞くところによりますと、いまはサマリアとか」と言う。第一のユダヤ人は、「……それだけでもわかる、メシアならサマリアにいるわけがない。サマリア人のところへなどメシアが来たりたまうわけがない。サマリア人は呪われているのだ。やつらは神殿に供物を捧げたことがないからな」と言う。第二のナザレ人は、「……サマリアにはもう二三日前からいない。おれはな、今頃はエルサレムのあたりに違いないと思う」と言うと、第一のナザレ人は、「……いや、違う、エルサレムにはいない。おれは今そこから来たばかりなのだ。あの男の消息がわからなくなってから、もう二月になる」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……まあ、そんなことはどうでもいい！　とにかくその男を探し出し、おれの命令だと言え、死人を生き還らせることなど、おれは許さぬとな。水を酒に変える、癩病やみや盲人を癒す……そんなことは、やりたければやるがいい。一々咎めだてはしまい。事実、癩病を癒してやるのはいいことだからな。しかし、死人を生き還らせるとなると、おれとしても許してはおけぬ……死人がこの世にもどって来たら、それこそ恐ろしいことになろう」と言うのであった。――さて、この「場面」で面白いと思うのは、死んだ人間を生き還らせるという話を聞いて、現王（ヘロデ）は、それに驚くのではなく、むしろ、「……死んだ人間を生き還らせることなど、おれは許さぬぞ」という展開になるところであり、それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、今までに実に数多くの人たちを殺害してきたのであり、その人たちが生き還ったら大変なことになるという思いと、もう一つは、異母兄弟である「兄」を殺害して、今の「王位」と「王妃」（ヘロデヤ）を手に入れたわけであるから、その「兄」（前王）が生き還ったら、それこそ大変なことになるという思いが働いているのである。

## 十四　王妃（ヘロデヤ）とヨカナーンの声

さて、現王（ヘロデ）が、「……死人がこの世にもどって来たら、それこそ恐ろしいことになろう」と言った後、突然、「ヨカナーンの声」が聞こえて来る。それは、「……ああ！　淫婦よ！　娼婦よ！　ああ！　隈どれる目蓋に金色の眼をもてるバビロンの娘！

聴け、主なる神はかく言ひたまふ。人をしてその女のもとに集らしめよ。かくして、おのおの石を手にして、女に向いて投げつけしめよ……」と叫ぶ。王女（ヘロデヤ）は、「……あの男を黙らせて！」と言うと、「ヨカナーンの声」は、さらに、「……軍の隊長をして、その剣もて女を刺し、楯もて押し殺さしめよ」（これは「軍の隊長たちをして、剣をもって（姦淫の）女を刺し、楯をもって（姦淫の女を）押し殺せ）と叫ぶ。王妃（ヘロデヤ）は、「……あれこそ、聞き捨てにできませぬ」と言うと、また、「ヨカナーンの声」で、「……かくして、おれは罪という罪をこの地上より拭き去ることが出来よう、世の女たちも、その女の姦淫を習わずにすむであろう」と叫ぶ。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……お聞きになりましたか、みんな私へのあてつけでございませぬか？　自分の妻が辱められるのを、そのまま聞き捨てになさるつもりでございますか？」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……だが、お前の名を口にしたわけではない」と言うので、王妃（ヘロデヤ）は、「……どう違います？　よく御存じのはず、あの男は私を辱めたいのでございます。でも、私はあなたの妃、そうではございませぬか？」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……いかにも、わが気高きヘロデヤ、お前はおれの妃だ、そして、かつては兄の妃であった」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……その人の腕から、あなたは、私をお奪いになったのです」と言う、現王（ヘロデ）は、「……その通りだ、おれの方が強かったからな。だが、そんな話はやめにしよう。おれは話したくないのだ。あの預言者の身の毛もよだつ恐ろしい言葉も、もとはと言えば、そこにある。或いは、そのために禍いが起こるかもしれない。が、その話はやめにしよう……妃、ヘロデヤ、客人のことをすっかり忘れていたぞ。さあ、酒をついでくれぬか。その銀の大杯を一つ残らず満たしてくれ、玻璃の大杯にもな。ローマ皇帝の健康のために乾杯しよう。ここにはローマの客人もいることだ、皇帝のために乾杯せねばならぬ」と言う。そして、一同は、「……ローマ皇帝のために、ローマ皇帝のために！」と乾杯するのであった。

＊　　＊

そして、現王（ヘロデ）は、「……お前には解らぬとみえる。お前の娘はたいそう蒼い顔をしているぞ」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……それがあたなに何の関わりがございます、あれが蒼い顔をしていようといまいと？」と言うので、現王（ヘロデ）は、「……だが、あれほど蒼い顔をしているのを、おれはついぞ見たことがない」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……あれをごらんになってはなりませぬ」と言う。すると、また、「ヨカナーンの声」が聞こえて来る。「……その日、日は黒布のごとく翳り、月は血のごとく染まり、空の星は無花果の実の、いまだ熟れざるに枝より落つるがごとく地に落ちかかり、地上の王たちはそのさまを見て恐れおののくであろう」とある。王妃（ヘロデヤ）は、「……ああ！　ああ！　それなら、私も見とうございます。月が血のごとく染まり、星が無花果の実の、いまだ熟れざるに落つるがごとく落ちてくる。早くその日になればいい。でも、あの預言者の口のききようときたら、まるで酔いどれ……本当に、あの声に我

慢ができない。あの声だけはいやでございます。黙るようにお命じくださいまし」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……それは出来ぬ、何を言っているのかおれには解らぬが、それにしても何かの前ぶれかもしれぬ」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……前ぶれなどというものを私は信じませぬ。あの口のききようときたら、まるで酔いどれ」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……恐らく、神の酒に酔うたのでもあろう」と言うので、王妃（ヘロデヤ）は、「……どんなお酒でございましょう、その神のお酒というのは？　どこの葡萄で造るのでございます？　どんな酒槽に入っているのでございます？」と皮肉を込めて言う。（……つまり、王妃「ヘロデヤ」という女性は、非常に「現実的な女性」であり、それゆえ、神や預言者或いは奇跡や予兆、その他など、全く信じていないのである。）

＊　　＊

さて、預言者（ヨカナーン）の「声」は、徹底的に「王妃」（ヘロデヤ）の「淫欲さ」を攻撃し、一方、王妃（ヘロデヤ）は、徹底的に「預言者」（ヨカナーン）を嫌っているという展開であり、それに加えて、現王（ヘロデ）はと言えば、「預言者」（ヨカナーン）をむしろ擁護するような会話になっている。これは、まさに「マルコ伝」の「ヘロデとヨハネ」の内容に沿ったものになっている。――つまり、「マルコ伝」では、「……王妃（ヘロデヤ）は、ヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、出来ないでいた。それはヘロデがヨハネを正しい聖なる人であると知って、彼を恐れ、また、保護を加えていたからである」。……すると、（王妃ヘロデヤにとって）よい機会が来た。現王（ヘロデ）は、自分の誕生祝いがあった時、王妃（ヘロデヤ）の「娘」が満座の中で舞を舞い、現王（ヘロデ）をはじめ、列座の人たちを喜ばせた。そこで王は少女に、「……ほしいものがあったら言ってみよ。褒美にやろう」と言い、さらに「……ほしければ、この国の半分でもあげよう」と誓った。そこで少女は座をはずして、母に「何をお願いしましょうか」と聞くと、母は、「……洗礼者ヨハネの首を」と答えるのである。むろん、これは、「マルコ伝」の内容（つまり「母が洗礼者ヨハネの首を求める」）という内容であり、一方、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』では、そうではなく、むしろ「サロメ」自身がまさに「預言者」（ヨカナーン）の「首を求める」という展開になっていくのである。それでは、それは、一体、なぜなのかと敢えて問えば、それこれは、まさにこれからの「物語」（ストーリー）の「展開」（内容）部分になっていくのである。

## 十五、現王（ヘロデ）と王妃（ヘロデヤ）との会話

現王（ヘロデ）の視線がサロメにとどまり、ついに動かなくなる。

さて、現王（ヘロデ）は、「……ティゲリヌス、先頃ローマへ行ったおり、皇帝はお前に話されたかな、例のことだが……？」と聞く。すると、若きローマ人（ティゲリヌス）は、「……例のとは、王さま、何のことでございましょう？」と聞くので、現王（ヘロデ）は、「……何のことか？　あゝ！　おれが聞いたのだったな、たしか？　ところで、何が聞きたかったのか、おれは忘れてしまったぞ」と言う。これは、一体、どういうことかと言えば、それは、現王（ヘロデ）は、王女（サロメ）ばかりを見ていて、それに気を奪われていて、それゆえ、「頭の中」（或いは「心の中」）は、どこか「上の空」（ものが考え

られない状態）になっているのである。だからこそ、王妃（ヘロデヤ）は、「……またあの子をごらんになっていらっしゃる。ごらんになってはいけませぬ。そう申しあげましたのに」となるのである。すると、現王（ヘロデ）は、「……お前はそのことばかりを申しておるな」と言うので、王妃（ヘロデヤ）は、「……それを、もう一度、申しあげておきましょう」と言う。現王（ヘロデ）は、「……ところで、問題の寺院の修理だが、だいぶ議論していたな？　あれは少しは捗ったか？　聞けば、聖壇の幕がなくなったというが、本当か？」と聞く。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……誰でもない、それを盗んだのはご自分、次々と口から出まかせの由なしごとをおっしゃってばかり。ここはもういやでございます。中へ入りましょう」と言う。――つまり、現王（ヘロデ）の「頭の中」（或いは「心の中」）は、王女（サロメ）のことで一杯になっていて、それゆえ、ものもろくに考えられない状態のなかで、終に、次の「言葉」を発してしまうのである。それは、「……サロメ、おれに踊りを見せてくれ！」という言葉であり、この「言葉」こそ、王女（サロメ）の運命と預言者（ヨカナーン）の運命を一気に激変させてしまう結果になってしまうのである。

＊　　＊

さて、現王（ヘロデ）は、「……サロメ、おれに踊りを見せてくれ」と言うと、王妃（ヘロデヤ）は、「……それはなりませぬ」と言う。王女（サロメ）は、「……今は、踊りとうはありませぬ、王さま」と答える。すると、現王（ヘロデ）は、「……サロメ、ヘロデヤの娘、おれに踊りを見せてくれ」と頼むのだった。王妃（ヘロデヤ）は、「……あれにお構いなさいますな」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……おれの命令だ、踊れ、サロメ」と言う。王女（サロメ）は、「……いやでございます、王さま」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……ごらんなさいまし、よく言うことを聞きますこと！」と笑う。すると、現王（ヘロデ）は、「……あれが踊ろうが踊るまいが、それがどうしたというのだ！。わしにとってなんでもない。今宵のおれは楽しいのだ、じつに楽しい。これほど楽しいことはなかったぞ」と言う。すると、第一の兵士は、「……暗い顔をしておられるな、王は、暗い顔をしておられるではないか？」と言う。第二の兵士も、「……いかにも、暗い顔をしておられる」と言う。現王（ヘロデ）は、「……どうして楽しんではいけないのだ？　ローマ皇帝が、あの世界の君主、万物の君主たる皇帝が、このおれをたいそうお引き立てくださる。今日もまた甚だ高価な贈物を届けてくださったところだ。それに、おれの敵、カパドシア王をローマへお呼びつけになるとのこと。恐らく、ローマでやつを磔にしようとのお心であろう。したいことはなんでもお出来になる、ローマ皇帝ともなればな。いずれにせよ、この世の主なのだからな。とすれば、いいか、おれには大いに楽しむ権利があるというわけだ。（そうだ、本当におれは楽しい。こんなに楽しい宵を、おれはついぞ知らぬ）。この世の何ものも今のおれの喜びを妨げることは出来ぬのだ」と言うのであった。――つまり、すべては自分の思い通りになっているのに、ただ一つ、なぜ王女（サロメ）だけが自分の思い通りにならぬのかと思い悩んでいるという場面になるのである。

すると、突然、「ヨカナーンの声」が聞こえて来る。それは、「……その男は王座についていよう。緋と紫の衣をまとうていよう。その手には瀆神の罪に満ちた黄金の盃を持っていよう。そうして主なる神のお使いがその男を打ち砕くのだ。やがて男は蛆の餌食となるであろう」と言うのであった。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……あれはあなたのこ

と。蛆の餌食になると申しております」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……おれのことではない。あの男は決しておれの悪口は言わぬ。あれはカパドシア王のことを言っているのだ。おれの敵のカパドシア王のことをな。やつなら蛆の餌食にもなろう。あれはおれのことではない。あの男はおれの悪口を言ったことは一度もない。あの預言者はな。ただ兄の妃を妻にした罪は別だ。それはおそらくあの男の言うことが正しいのであろう。事実、お前は生まず女だからな」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……この私が産まず女と。それをあなたがおっしゃる、絶えずあの子ばかりごらんになっているあなたが、ご自分の慰めにあの子を踊らせたがっておいでになるあなたが。よくもそんな埒もないことを。私には、子供があります。あなたには子供が一人もいません。ええ、一人の奴隷もあなたの子を産みはしなかった。子供が出来ぬのはあなた、私ではありませぬ」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……黙れ。お前こそ産まず女なのだ。おれの子を産めなかった。それをあの預言者は言うのだ。おれたちの結婚は本当の結婚ではないと。近親相姦の結婚、やがては禍いをもたらす結婚だと。……あれの言葉は当たっているかもしれぬ。確かに当たっていよう。しかし、今そんなことをとやかく言うている暇はない。今のおれは心から楽しみたい。事実、楽しいのだ。（おれは本当に楽しい）。今のおれには、何一つ不足なものはない」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……今宵、そのようにご機嫌とは、私もうれしゅう存じます。めったにないこと。でも、もう夜もふけました。中へ入りましょう。明日の朝は早くから狩りに出かけることをお忘れになりませぬよう。皇帝のご使者ですもの、出来るだけおもてなしせねばなりますまい、そうではございませぬか？」と言うのであった。――この場面は、預言者（ヨカナーン）の言葉を聞いて、現王と王妃の夫婦間にいわば一つの「亀裂」が生じている場面であるが、それは、一方の王妃（ヘロデヤ）は、一貫して、預言者（ヨカナーン）の言葉に対しては強く反発しているが、一方の現王（ヘロデ）はと言えば、むしろ預言者（ヨカナーン）の言葉を素直に受け入れている心境であり、それは、「……あの預言者は言うのだ。おれたちの結婚は本当の結婚ではないと。近親相姦の結婚、やがては禍いをもたらす結婚だと。……あれの言葉は当たっているかもしれぬ。確かに当たっていよう。しかし、今そんなことをとやかく言うている暇はない」と言いながらも、心のどこかでは、「……何か禍いをもたらすのではないか」と不安になっている心境なのである。

## 十六、現王（ヘロデ）と王女（サロメ）との会話

さて、第二の兵士は、「……たいそう暗い顔をしておられるな、王は」と言い、第一の兵士も、「……うむ、いかにも暗い顔をしておられる」と言うのであった。現王（ヘロデ）は、「……サロメ、サロメ、おれに踊りを見せてくれ。頼む、踊りを見せてくれ。今宵のおれは気がめいって仕方がない。そうだ、ひどく気がめいるのだ。さっき、ここへ出て来た時、血に足が滑った。それも不吉な前ぶれだが、続いてこの耳に、はっきりとこの耳に、何か空に羽ばたく音が、途方もなく大きな翼の羽ばたく音が聞こえて来た。それが何を意味するか知らぬ……が、今宵のおれは気がめいって仕方がない。せめておれに踊りを見せてくれ。踊りを見せてくれ、サロメ、頼む。踊ってくれたら、なんなりとほしいものをつかわそう。（うむ、踊ってくれさえしたら、サロメ、なんなりとほしいものをつかわすぞ）。

たとえこの国の半分をと言われようとも」と言う。すると、王女（サロメ）は、立ち上がり、「……本当に、ほしいものはなんでもと、王さま？」と聞く。一方、王妃（ヘロデヤ）は、「……踊ってはなりませぬ、サロメ」と言うが、現王（ヘロデ）は、「……なんなりと、たとえこの国の半分でもな」と言う。王女（サロメ）は、「……それをお誓いに、王さま？」と言うので、現王（ヘロデ）は、「……誓うぞ、サロメ」と言うが、王妃（ヘロデヤ）は、「……サロメ、踊ってはなりませぬ」と繰り返す。王女（サロメ）は、「……何にかけてお誓いなさいます、王さま？」と聞くので、現王（ヘロデ）は、「……命にかけて、この冠（かんむり）にかけて、わが神々にかけて。なんなりとお前の望むものをつかわそう。たとえこの国の半分をと言われようとも、踊りを見せてくれさえすればな。おお！　サロメ、サロメ、おれに踊りを見せてくれ」と頼むのであった。すると、王女（サロメ）は、「……あなたはお誓いになりました、王さま」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……確かに誓ったぞ、サロメ」と言う。王女（サロメ）は、「……あたしのほしいものは何でもと、たとえこの国の半分でもと？」と念を押すと、王妃（ヘロデヤ）は、「……踊ってはなりませぬ」と繰り返すばかりだが、現王（ヘロデ）は、「……たとえこの国の半分でもな。お前ならさだめし立派な女王になろう。サロメ、この国の半分を所望するとなればな。あれなら女王として恥ずかしくはない。そうは思わぬか？　……ああ！　ここは冷たい！　たいそう冷たい風だな、また聞こえる。……どうしてあんなものが聞こえてくるのだ、空に何か羽ばたく音が？　おお！　まるで鳥が、大きな黒い鳥が、墓地（ぼち）の上を舞っているような。おれにはなぜそれが見えぬのだ、その鳥の姿が？　あの羽ばたく音の恐ろしさ、あの風音の恐ろしさ。冷たい風だな。……いや、冷たくはない。それどころか、ひどく暑い。暑くてかなわぬ。息がつまる。この手に水をかけろ。雪を口に含ませてくれ。マントをゆるめろ。早くしないか！　早く！　マントをゆるめろと言うのに。……いや、このままでいい。苦しいのは冠だ、この薔薇の冠だ。花が火のように燃える。額が焼けただれてしまったぞ。（頭から花環（はなわ）の冠をむしり取って、テーブルの上に投げる）、ああ！　やっと息がつける。この花びらの赤いこと！　まるで布についた血のしみのようだ。いや、それがどうしたというのだ。見るものすべてに意味を読みとる法はない。それでは生きてゆけぬ。こういったらいい、血のしみは薔薇の花びらのように美しいと。それより、いっそこういったら、……もうそんな話はやめにしよう。今のおれは楽しい。心から楽しいのだ。楽しんではならぬとでもいうのか？　今のおれは楽しい。心から楽しいのだ．楽しんではならぬというのか？　お前の娘が踊りを見せてくれるのだぞ。さあ、踊りを見せてくれぬか、サロメ？　見せてくれると約束したはずだぞ」と言うのであった。

＊　　＊

さて、この「場面」では、現王（ヘロデ）の「頭の中」（或いは「心の中」）は、かなり混濁している「精神状態」であるが、その「理由」としては、まず、「……あの預言者は言うのだ。おれたちの結婚は本当の結婚ではないと。近親相姦の結婚、やがては禍（わざわ）いをもたらす結婚だと。……あれの言葉は当たっているかもしれぬ。確かに当たっていよう。しかし、今そんなことをとやかく言うている暇はない」と言いながらも、心のどこかでは、「……何か禍（わざわ）いをもたらすのではないか」と不安や心配になっている「精神状態」であると同時に、「……今宵のおれは気がめいて仕方がない。そうだ、ひどく気がめいるのだ。さっき、ここへ出て来た時、血で足が滑った、それも不吉な前ぶれだが、続いてこの耳に、

はっきりとこの耳に、何か空に羽ばたく音が、大きな翼の羽ばたく音が聞こえて来た。それが何を意味するか知らぬ……が、今宵のおれは気がめいって仕方がない。せめておれに踊りを見せてくれ。踊りを見せてくれ、サロメ、頼む。踊ってくれたら、なんなりとほしいものをつかわそう」と言うのであった。――つまり、そのような「様々な理由」から「今宵のおれはひどく気がめいて仕方がない」という「精神状態」となり、その「精神状態」からこそ、まさに「……せめておれに踊りを見せてくれ。サロメ、頼む。踊ってくれたら、なんなりとほしいものをつかわそう」という「言葉」へとなって行くのである。

逆に言えば、現王（ヘロデ）の「頭の中」（或いは「心の中」）がこれほどの「気のめいった精神状態」でなかったならば、或いは、「……命にかけて、この冠にかけて、わが神々にかけて、なんなりとお前の望むものをつかわそう。たとえこの国の半分をと言われようとも、踊りを見せてくれさえすれば」というような「誓い」など立てなかったかも知れないのである。――それは。例えば、最初、現王（ヘロデ）が、「……サロメ、おれに踊りを見せてくれ」と頼んだ時に、王女（サロメ）は、「……いやでございます、王さま」と言うのを聞いて、現王（ヘロデ）は、「……あれが踊ろうが踊るまいが、それがどうしたというのだ！　わしにとってなんでもない」というように、比較的冷静に対応できたかも知れない。――ところが、あまりに「気のめいった精神状態」だったからこそ、まさに「何が何でもサロメの踊りを見て気晴らしをという精神状態」に深く陥ってしまったのである。もちろん、これは、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』ではそうなっているということである。――ちなみに、「……はっきりとこの耳に、何か空に羽ばたく音が、大きな翼の羽ばたく音が聞こえて来た。それが何を意味するか知らぬ……が」とあるが、これは、預言者（ヨカナーン）の、「……おれには聞こえるぞ、この宮殿に死の天使の羽ばたく音が」と叫ぶ場面があるが、それは、この宮殿に「死者が出るぞ」という預言であり、それは、まず、「若いシリア人」（親衛隊長）が自害をするのを初めとして、やがて、「預言者」（ヨカナーン）と「王女」（サロメ）の死、そして、最後は、「現王」（ヘロデ）の死、それは、「預言者」（ヨカナーン）の、「……その男は王座についていよう。緋と紫の衣をまとうていよう。その手には瀆神の罪に満ちた黄金の盃を持っていよう。そうして主なる神のお使いがその男を打ち砕くのだ。やがて男は蛆の餌食となるであろう」となって行くのである。

＊　　＊

さて、王妃（ヘロデヤ）は、「……それはなりませぬ」と何度も繰り返し反対をするが、一方、王女（サロメ）は、終に「……踊りをお見せいたしましょう、王さま」と受け入れてしまう。――それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、現王（ヘロデ）が、まさに「……お前の望むものはなんなりとつかわそう」と言ったからであり、この時に、恐らく、「預言者」（ヨカナーン）の「首を求める」という「考え方」がふと浮かんで来たに違いない。……そして、現王（ヘロデ）は、「……聞いた通りだ、お前の娘はああ言うている。おれに踊りを見せてくれようというのだ。当然のことだぞ、サロメ、おれに踊りを見せてくれようというのは。踊りが終わったら、いいか、忘れるなよ、なんなりとお前の望むものを求めるがいい。なんなりとお前の望むものをつかわそう、たとえこの国の半分をと言われようともな。おれは誓った、そうではないか？」と言う。すると、王女（サロメ）は、「……あなたはお誓いになりました。王さま」と言う。むろん、この時点では、まさか「預

言者」（ヨカナーン）の「首を求める」などとは、夢にも思わなかったからこそ、次のような強気の発言を最後までしてしまうのである。――つまり、現王（ヘロデ）は、「……しかも、おれは今日まで約束を破ったことがない。誓いを立てて自らそれを破る手合いとは違うのだ。おれは嘘をつくことを知らぬ。おのれの言葉には奴隷のごとくかしづき、おれの言葉は王の言葉だ。カパドシア王はいつも嘘を言う。あの男は真の王ではない。卑怯者だ。それに、おれから金を借りておきながら、返そうとしない。あまつさえ、おれの使者を辱めた。聞きずてならぬ言辞を弄したのだ。が、やつがローマへ行けば、皇帝が磔にしてくれよう。きっと皇帝はやつを磔になさろう。たとえそうならずとも、所詮は蛆の餌食となろう。あの預言者がはっきりそう預言している。さあ！　サロメ、何を待っているのだ」と聞くと、王女（サロメ）は、「……奴隷たちを待っております。やがて香料と七つのヴェールを持って参りましょう。そして、このサンダルを脱がしてくれましょう」と言うのであった。

十七、奴隷たちは香料と七つのヴェールを運んで、サロメのサンダルを脱がす。

さて、現王（ヘロデ）は、「……ああ！　裸足で踊ろうというのだな、素晴らしい！　素晴らしいぞ！　お前の小さな足は白い鳩となろう。木の枝先に揺れ踊る小さな白い花ともなろう。おお！　ならぬ、踊れば血を踏もう！　あたり一面、血のしぶきだ。血の上を踊らせるわけにはいかぬ。それこそ、この上もない不吉の前ぶれとなろう」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……あれが血の上で踊ったとて、あなたにとってなんでございましょう？　あなたこそ血の海をさんざんお渡りなさいましたに……」と言うと、現王（ヘロデ）は、「……それがおれにとってなんだと？　ああ！　見ろ、あの月を！　赤くなって来たぞ。血のように赤くなって来たぞ。ああ！　あの預言者の預言は本当だったのだ。あの男は預言した。月が血のように赤くなると。あの男はそう預言しなかったか？　みんなも聞いていよう。それ、月が血のように赤くなった。あれが見えぬか？」と言うと、王妃（ヘロデヤ）は、「……ええ、よく見えますこと、そして星が無花果の実、いまだ熟れざるに落つるがごとく落ちるのでは？　それから日が黒布のように翳り、地上の王たちはそのさまを見て恐れおののくとか。それなら誰にも見えましょう。あの預言者も初めて本当のことを申しました。地上の王たちはそのさまを見て、恐れおののくとか。……さ、中へ入りましょう。お加減が悪いのです。ローマではお気が違うたと噂されましょう。とにかく奥へ」と言うのであった。

＊　　＊

さて、この「場面」は、「血と赤」という言葉が非常に数多く出てくるが、それは、やはり現王（ヘロデ）の「頭の中」（或いは「心の中」）では、何か「不吉なこと」が起こるのではないかと恐れ怯えている「心的状態」であり、それゆえ、現王（ヘロデ）の眼には、預言者（ヨカナーン）の「預言通り」に「……月が赤く見えている」のかも知れないが、しかし、実際はそうではなく、王妃（ヘロデヤ）の眼には、「……月は赤くは見えてはいない」のであり、それゆえ、「……よしよし、わかった、わかったと、子供をなだめるように、お加減が悪いのです。ローマではお気が違うたと噂されましょう」と言いながら、とにかく奥へと連れて行こうとしているのである。

＊　　＊

すると、突然、「ヨカナーンの声」が聞こえて来る。「……何者だ、エドムの地より来たれるものは、深紅に染めし衣をまとい、その都ボズラより来たれるもの、美しき装いに光り輝き、権威を傘に威張り歩くものは？　なにゆえ、汝の衣は緋色に染めてあるのか」と叫ぶ。（ちなみに、エドムの地は、ヘロデの生地、都ボズラは、エドムの地にある都）。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……中へ入りましょう。あの声には我慢がなりませぬ。あの男がああして喚いているうちは、娘を踊らせとうはありませぬ。あなたがそうしてあの子をごらんになっているうちは、娘を踊らせとうはありませぬ。とにかく、私は娘を踊らせとうないのでございます」と言う。現王（ヘロデ）は、「……立つな。ヘロデヤ、妃、無駄なことだ。奥へは行かぬ、サロメが踊り終わるまではな。踊れ、サロメ、おれに踊りを見せてくれ」と言うと、王妃（ヘロデヤ）は、「……踊ってはなりませぬ。サロメ」と言うが、王女（サロメ）は、「……いつでも、王さま」と言うのであった。

＊　　＊

ところで、王妃（ヘロデヤ）は、なぜ、王女（サロメ）が踊ることをいやがっているのだろうか？　それは、次のようなことである。まず、「……どうして王さまはあたしを見てばかりいるのだろう。母上の夫ともあろうかたが、あのような目で私を見るなんて！」というように、現王（ヘロデ）という人物は、「前王」（異母兄弟の兄）を「古い井戸」（つまり牢獄）に監禁をして、その「王位」と「妃」（ヘロデヤ）とを手に入れただけではなく、王妃（ヘロデヤ）の連れ子の「娘」（サロメ）までも何とか手に入れようと「色目」で見ているのであり、それに対して、王妃（ヘロデヤ）は、何度も、「……あの娘を見てはなりませぬ！　あなたはいつもあの娘ばかり見ておいでになる」と言うと、現王は、「……そなたはそのことばかり申しておるな」となるが、それは、王妃（ヘロデヤ）にしてみれば、自分の「夫」（ヘロデ）は、いつか自分の「娘」（サロメ）に手を出すのではないかと、そのことばかりを何よりも恐れていると同時に、自分の「娘」（サロメ）に自分の「夫」（ヘロデ）を奪われるかも知れないという「不安と嫉妬心」でもあるのである。それは、わが娘（サロメ）が魅惑的な踊りを踊れば踊るほど、夫である現王（ヘロデ）の心は完全に奪われてしまう。それだけは何が何でも避けたいという心理でもあるのである。

## 十八、七つのヴェールの踊りとヨカナーンの首の要求

さて、現王（ヘロデ）は、「……ああ！　見事！　見事だったな！．見ろ、踊ってくれたぞ、お前の娘は。来い、サロメ！　ここへ、褒美をつかわす。ああ！　おれは舞姫にはいくらでも礼を出すのだ、おれという男はな。ことにお前には、十分礼がしたい。なんなりとお前の望むものをつかわそう。何がほしいな？　言え」と言う。すると、王妃（サロメ）は、膝まづいて、「……私のほしいものとは、なにとぞお命じくださいますよう、今すぐここへ、銀の大皿にのせて……」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、笑って、「……銀の大皿にのせて！　いいとも、銀の皿にな、わけもないこと。かわいいことを言う。そうではないか？　それはなんだな、銀の皿にのせてくれとお前が言うのは、おお　おれの美しいサロメ、ユダヤのどの娘よりも美しいお前がほしいと言うのは、一体なんなのだ？　銀の皿にのせて、何をお前はほしいというのだ？　言え。なんでもいい、きっとそれを

取らせる。おれの宝はことごとくお前のものだぞ。それは一体なんなのだ、サロメ？」と聞くと、王女（サロメ）は、立ち上がり、「……ヨカナーンの首を」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……ああ！　よう言うてくれました、サロメ」と言うが、一方、現王（ヘロデ）は、「……ならぬ、それはならぬ」と言う。王妃（ヘロデヤ）は、「……よう言うてくれました、サロメ」と、再び、言うと、現王（ヘロデ）は、「……ならぬ、それはならぬ、サロメ、そんなものを求めてはならぬ。母親の言うことなど聞くな。あれはいつもお前に悪知恵を注ぎこむ。あの女の言うことを聴いてはならぬ」と言うのである。

すると、王女（サロメ）は、「……母の言うことを聴こうというのではございませぬ。ただ自分の心の欲するまま、銀の皿にヨカナーンの首をと申しあげましたまでのこと。確かにあなたはお誓いになりました。ヘロデ王、お忘れになってはなりませぬ、確かにお誓いになりました」と言う。すると、現王（ヘロデ）は、「……解っている、おれは神々にかけて誓った。よく解っている。だが、頼む、サロメ、何かほかのものを望め。領土の半分を望め、それなら、おれは喜んでつかわすぞ。が、あれはならぬ、そのお前のほしいと言ったものだけは」と言う。すると、王女（サロメ）は、「……私はヨカナーンの首がほしゅうございます」と言う。現王（ヘロデ）は、「……ならぬ、それはならぬ、おれはいやだ」と言うと、王女（サロメ）は、「……あなたはお誓いになりました。ヘロデ王」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）も、「……そう、あなたはお誓いになりました。みんな聞いておりましたこと。あなたはそれをみんなの前でお誓いになりました」と言う。現王（ヘロデ）は、「……黙れ。お前に話しているのではない」と言うと、王妃（ヘロデヤ）は、「……当然のことでございます。娘があの男の首を望むのは。あの男は私に罵詈雑言のかずかずを浴びせかけました。なにかとあてつけがましゅう随分ひどいことを申しました。お解りでございましょう。あの子は母を深く愛しております。ひいてはなりませぬ。サロメ、王はお誓いになった。王はお誓いになったのだよ」と言うのであった。

＊　＊

さて、現王（ヘロデ）の誕生祝いに、高官や将校やガリラヤの名士たちを招待して宴会が催された時、王妃（ヘロデヤ）の娘（サロメ）が席に出て舞を魅惑的に舞い、現王（ヘロデ）をはじめ、列座の人たちを喜ばせたということである。そして、その「踊り」こそは、あまりにも有名な「七つのヴェールの踊り」であるが、しかし、それが具体的には一体どのような「踊り」であったかは、歴史的には何の記述も残されてはいないので、分かりようもないが、しかし、恐らく、ハーレムなどで踊られる「ベリーダンス」に近いものではないかと思う。そして、この「七つのヴェールの踊り」をいかに魅惑的に表現でき得るかが、例えば、「映画や芝居」などでの最大の「見せ場」の一つにもなるのだろう、それでは、一体、どのようなものであれば最も魅惑的な踊りになるのかと問えば、それは、恐らく、次のようなものではないかと思う。――まず、必ず、「七つのヴェール」を使っての踊りになるわけであるが、その場合、大きく二つの「方法」があるかと思う。その一つは、胸と下半身の両方に「下着」をしっかり付けて、その上から全身を「七つのヴェール」で覆い、そして、音楽に合わせて舞姫が魅惑的に舞い踊りながら、その「七つのヴェール」を一枚ずつ魅惑的に脱ぎ捨てていくという方法である。そして、これが最も一般的な「表現方法」であるが、その場合、胸の膨らみなどを少し見えるようにすると、より魅惑的になるのかも知れない。そして、もう一つは、胸と下半身の両方ともに「下着」

をはっきりとは付けず、全身を「七つのヴェール」で覆い、そして、音楽に合わせて舞姫が魅惑的に舞い踊りながら、その「七つのヴェール」を一枚ずつ魅惑的に脱ぎ捨てていくという方法である。――つまり、最大の「要点」は、その「七つのヴェール」をいかに魅惑的に使いきるかにかかっているのであり、例えば、全身を覆うヴェール一枚をはじめ、顔や胸まわりの長いヴェール一枚、左右両腕に一枚ずつの長めのヴェール、また、腰まわりの少し長いヴェール一枚、あとは、胸を覆うヴェール一枚と、下半身を覆うヴェール一枚、この「七つのヴェール」で魅惑的に舞い踊りながら、順に魅惑的に踊り舞いつつ脱ぎ捨てていくものであり、最後は、下半身のヴェール一枚を取り除いたところで、「七つのヴェールの踊り」が終わるという段取りになるのである。つまり、「……全身のヴェール一枚→顔や胸まわりの長いヴェール一枚→左右両腕のヴェール一枚ずつ→腰まわりのヴェール一枚→胸のヴェール一枚→下半身のヴェール一枚」のどの順でも、魅惑的に舞い踊りながら、順に魅惑的に踊り舞いつつ脱ぎ捨てていくという方法である。（もちろん、胸や下半身の部分は、最小限のものを付けているか、目には見えないような「肌色のもの」を何か身に付けているのであり、一見はほぼ「全裸になった」ように見えてはいるが、実際は、最小限のものを付けているか、「肌色のもの」を何か身に付けているということである。）

## 十九、現王（ヘロデ）の説得　その一

さて、現王（ヘロデ）は、「……黙れ、何も言うな。……いいか、サロメ、人として、ものの道理をわきまえねばならぬ。そうではないか？　（人はものの道理をわきまえねばなるまい？）、おれはこれまでお前に辛う当たったことはない。いつもお前をかわいがってきたな……たぶん、おれはかわいがり過ぎたのだ。だから、それだけは求めるな。恐ろしい。身の毛もよだつ、そんなものをほしがるなどと。最も、本気で言うているとは思わない、男の斬り首など、醜悪極まるものではないか？　そんなものを娘が見たがることはあるまい。そんなものを眺めて一体何が楽しいのだ？　楽しいわけがない。いや、いや、そんなものをお前がほしがるはずはない。……まあ、おれの言うことを聴け。おれはエメラルドを持っている、皇帝の寵臣から贈られた丸い大きなエメラルドだ。このエメラルドを透かして見ると、遠く離れた国々の出来事まで手にとるようにうかがえる。皇帝ご自身、競技場へはそれと同じものを持って行かれるとか。が、おれのはそれより大きい。おれはよく知っている、おれのほうが大きいのだ。それこそ世界で一番大きいエメラルドなのだ。お前はそれがほしゅうはないか？　それを望むがいい、きっとやるぞ」と言うと、王女（サロメ）は、「……私はヨカナーンの首がほしゅうございます」と言うので、現王（ヘロデ）は、「……おれの言うことを聴いていないな、お前は聴いていないのだな。頼む、おれの言葉を聴いてくれ、サロメ」と言うが、王女（サロメ）は、ただ「……ヨカナーンの首」と繰り返すばかりである。

＊　　＊

さて、この最初の「説得」は、実に「知性的」（理性的）であり、それは、「……いいか、サロメ、人として、ものの道理をわきまえねばならぬ。そうではないか？　（人はものの道理をわきまえねばなるまい？）、おれはこれまでお前に辛う当たったことはない。

いつもお前をかわいがってきたな……たぶん、おれはかわいがり過ぎたのだ。だから、それだけは求めるな。恐ろしい。身の毛もよだつ、そんなものをほしがるな」と言うと同時に、「……最も、本気で言うとは思わない、男の斬り首など、醜悪極まるものではないか？　そんなものを娘が見たがることはあるまい。そんなものを眺めて一体何が楽しいのだ？　楽しいわけがない。いや、いや、そんなものをお前がほしがるはずはない」と言っている。――つまり、現王（ヘロデ）という人は、王女（サロメ）がなぜ「預言者」（ヨカナーン）の首などを求めるのか？　その「理由」がさっぱり分からないという「心的状態」になっているのである。それは、一体、なぜなのかと問えば。それは、王女（サロメ）と預言者（ヨカナーン）とが実際に会って、直接「会話を交わしていた」ことなどは、全く何も知らない状態であり、それゆえ、なぜ「預言者」（ヨカナーン）の首などを求めるのか？　その「理由」がさっぱり分からないということである。

一方、王妃（ヘロデヤ）は、逆に、「……当然のことでございます。娘があの男の首を望むのは。あの男は私に罵詈雑言のかずかずを浴びせかけました。なにかとあてつけがましゅう随分ひどいことを申しました。おわかりでございましょう。あの子は母を深く愛しております。ひいてはなりませぬ。サロメ、王はお誓いになった。王はお誓いになったのだよ」と言うのである。――これは、王妃（ヘロデヤ）も、また、王女（サロメ）と預言者（ヨカナーン）とが実際に会って、直接「会話を交わしていた」ことなどは、全く何も知らない状態であり、それゆえ、自分を深く愛するがゆえに、王女（サロメ）は、まさに「預言者」（ヨカナーン）の首を求めているのだと思い込んでいるのである。――その後、現王（ヘロデ）は、「……世界で一番大きいエメラルドの宝石を、お前が望むなら、きっとやるぞ」と説得するが、王女（サロメ）は、ただ「……私はヨカナーンの首がほしゅうございます」と言うばかりである。

## 二十、現王（ヘロデ）の説得　その二

現王（ヘロデ）は、「……ならぬ、それはならぬ、そんなものがほしいはずがない。そんなことを言うのは、ただおれを苦しませるためであろう。宵からずっとお前を見てばかりいたおれを、うむ！　いかにも、その通りだ。今夜のおれはお前ばかり見つめていた。お前の美しさに苦しめられてきた。お前の美しさにおれは果てしなく苦しめられ、そうして、おれはお前にばかり見入ってきた。だが、もう見まい。人は何物にも、何人にも、眼をつけてはならぬのだ。ただ、鏡だけを見ておればよい。鏡は仮りの面しか写さぬからな。……おお！　おお！　酒をくれ！　咽喉が乾く。……サロメ、サロメ、仲直りをしよう。とにかく、そうではないか。……おれは何が言いたかったのか！　一体、何を！　ああ！　思い出したぞ！　サロメ！　いや、もっと近くへ寄れ。おれの話を聴いていないな。

サロメ、お前は知っていよう、おれの白孔雀を、庭の天神花と大きな糸杉の間を歩いている、あの美しい白孔雀を。いずれも嘴は金色に輝き、啄む草の実も金色、脚は紅。鳴けば雨が降り、尾を拡げれば、中空に月が昇るという素晴らしいやつだ。二羽ずつ連れだち、糸杉と黒い天神花の間を歩いているが、その一羽一羽に奴隷がかしずいているのだ。時に樹の間をよぎって飛び、また時には芝の上、池のほとりにうずくまる。世にかほど素晴らしい鳥はない。世のいかなる王も、かほど素晴らしい鳥は持っておらぬぞ。ローマ皇

帝もこれほどの鳥は持っておられまい。うむ、よし！　そのおれの孔雀を五十羽つかわそう。それは群れをなして、どこへでもお前のあとについていこう、その群れに囲まれたお前の姿は、大きな白雲の中の月のようであろう。……あれをみんなお前にやろう。おれは百羽しか持っておらぬが、世のいかなる王もあれほどの孔雀は持ってはおらぬぞ、それをみんなやろうというのだ。ただ、お前はおれを言葉の縛めから解き放ってくれねばならぬ、あれだけは望まぬようにしてくれ、あのお前のほしいと言ったものだけは」と言い、盃の酒を飲み干すのであった。――一方、王女（サロメ）はと言えば、ただ「……私にヨカナーンの首をくださいまし」と言うばかり。それを聞いて、王妃（ヘロデヤ）は、「……よう言うてくれました。サロメ！　それをあなたの話ときたら、まるで子供だまし、孔雀だなどと」言ってとなるのである。

＊　　＊

さて、今度の第二回目の「説得」は、むしろ自分の「反省と自戒」とを込めたものであり、それは、「……そんなことを言うのは、ただおれを苦しませるためであろう。宵からずっとお前を見てばかりいたおれを、うむ！　いかにも、その通りだ。今夜のおれはお前ばかり見つめていた。お前の美しさに苦しめられてきた。お前の美しさにおれは果てしなく苦しめられ、そうして、おれはお前にばかり見入ってきた。だが、もう見まい。人は何物にも、何人にも、眼をつけてはならぬのだ。ただ、鏡だけを見ておればよい。鏡は仮りの面しか写さぬからな」といわば「反省と自戒」とを込めて言うが、しかし、ここで最も大事な言葉は、次の「言葉」であり、それは、「……お前の美しさに苦しめられてきた。お前の美しさにおれは果てしなく苦しめられ、そうして、おれはお前にばかり見入ってきた」という言葉であり、この「言葉」は、まさに現王（ヘロデ）という人物の「心の声」（いわば「告白」）でもあり、毎年、日増しに美しくなって来る王女（サロメ）を見るにつけ、王妃（ヘロデヤ）の一人娘（サロメ）に思いを寄せることは、まさに「近親相姦」になるので、何とか避けようと苦しんではきたが、しかし、今では自分でも自分がもう押さえ難いほどになってしまったのである。それゆえ、「……もう見まい」と「反省と自戒」とを一応は述べてはいるが、しかし、それが実行できるかどうかは本人にももう全く分からない状態にあるのである。

そして、現王（ヘロデ）は、世にも珍しい「白孔雀」をお前に五十羽つかわそう。世のいかなる王もあれほどの孔雀は持ってはおらぬぞ、それをみんなやろうというのだ。ただ、お前はおれを言葉の縛めから解き放ってくれねばならぬ、あれだけは望まぬようにしてくれ、あのお前のほしいと言ったものだけは」と言い、盃の酒を飲み干すのであった。それでは、なぜそれほどまでに「……あれだけは望まぬようにしてくれ、あのお前のほしいと言ったものだけは」と言うのだろうか？　それは、次のところではっきりと明言されることになるが、それはそれとして、現王の話を聞いた王妃（ヘロデヤ）は、「……あなたの話ときたら、まるで子供だまし、孔雀だなどと」言ってと、笑うのである。

## 二一、現王（ヘロデ）の説得　その三

次に、現王（ヘロデ）は、「……黙れ。お前は喚いてばかりいる。まるで猛獣のように喚くだけだ。そう喚くな。その声を聞いているだけで、うんざりする。黙っているのだぞ。

……サロメ、自分のしようとしていることをよく考えてみるがいい。あの男はたぶん神の使いであろう。（確かに神の使いに違いない）。聖者なのだぞ。神の指先があの男に触れたのだ。神があの男の口に恐ろしい言葉を預けたのだ。宮殿のうちにあっても、荒野におった時と同じに、神は常にあの男と共にある。……とにかく、そうとしか思われぬ。もちろん、誰にも解ることではない、が、恐らく、神はあの男に身方し、あの男と共にあるに違いない。となれば、もしあの男が死にでもしたら、何か禍いが起こるかもしれぬ、このおれの上にな。事実、あの男は言っている、自分が死ぬ日には何者かに禍いが起ころうとな。それこそ、このおれのほかにはない。覚えていよう、おれはさっきここへ出て来た時、血に足を滑らせた。それに、おれは何か空に羽ばたく音を、途方もなく大きな翼の羽ばたく音を聞いている。いずれもこの上ない不吉な前ぶれだ。その上、まだある。きっと、ほかにもまだ眼には見えぬ様々なことがあるに違いない。まあ、いい！　サロメ、まさかお前は望みはしまい、このおれに禍いあれかしとは？　お前がそのようなことを望むはずがない。とにかく、おれの言うことを聴いてくれ」と頼むのであった。――しかし、王女（サロメ）は、「……私にヨカナーンの首をくださいまし」と言うばかりである。

＊　　＊

さて、現王（ヘロデ）という人物は、なぜ、どうして「……あれだけは望まぬようにしてくれ、あのお前のほしいと言ったものだけは」と言うのだろうか？　それは、次のような理由からなのである。つまり、「……あの男はたぶん神の使いであろう。確かに神の使いに違いない。聖者なのだぞ。神の指先があの男に触れたのだ。神があの男の口に恐ろしい言葉を預けたのだ。宮殿のうちにあっても、荒野におった時と同じに、神はつねにあの男と共にある。……とにかく、そうとしか思われぬ。もちろん、誰にも解ることではない、が、恐らく、神はあの男に身方し、あの男と共にあるに違いない。となれば、もしあの男が死にでもしたら、何か禍いが起こるかもしれぬ、おれの上にな。事実、あの男は言っている、自分が死ぬ日には何者かに禍いが起ころうとな。それこそ、このおれのほかにはない。覚えていよう、おれはさっきここへ出て来た時、血に足を滑らせた。それに、おれは何か空に羽ばたく音を、途方もなく大きな翼の羽ばたく音を聞いている。いずれもこの上ない不吉な前ぶれだ。その上、まだあるが、まあ、いい！　サロメ、まさかお前は望みはしまい、このおれに禍いあれかしとは？　お前がそのようなことを望むはずがない。とにかく、おれの言うことを聴いてくれ」と頼むのであった。そして、これこそは、まさに現王（ヘロデ）という人物の「本心」（本音）そのものである。ところが、王女（サロメ）は、ただ「……私にヨカナーンの首をくださいまし」と言うばかりである。

## 二二、現王（ヘロデ）の説得　その四

現王（ヘロデ）は、「……それ、まるで何も聴いておらぬではないか。まあ、落ち着いて話をしよう。おれの方はしごく落ち着いている。すっかり落ち着いているぞ。聴け。おれはここに宝石を隠してあるのだ、お前も母もまだ見たことのない、世にも珍しい宝石をな。なかには、四筋に編んだ真珠の首飾りがある。銀の光でつないだ月と言おうか。金の網目にかかった無数の月と言おうか。それはさる女王がその象牙の胸にかけていたものだ。お前なら、お前がそれをかければ、その女王に劣らず美しく見えよう。おれは紫水晶を

二種類持っている。黒いほうは葡萄酒のよう。赤いほうは水をさした葡萄酒のよう。おれはトパアズも持っている。虎の眼のように黄色いやつ、野鳩の眼のように桃色のやつ、猫の眼のように緑色のやつ。オパールも持っているぞ、一つは凍りつくような焔をたてて燃えている。一つは人の心を悲しませ、闇を恐れしめるのだ。それに、縞瑪瑙も持っている、死んだ女の瞳のようなやつをな。月長石も持っているぞ、そいつは月とともに色を変え、日にあたれば蒼ざめる。サファイアも持っている。卵ほども大きく、青い花のように青いのを。そのなかには潮が流れ、月の光もその波の青さを消し去ることはできない。それにクリソライトとベリルがある、クリソプレイスとルビーもある、サドニクスとヒヤシンス・ストーンとカルケドニイもな、それをみんなお前にやろう。いいか、みんなだぞ、いや、まだあるのだ。インド王からたった今送られてきたばかりの鸚鵡の羽で作った扇が四本、それからスミディア王から送ってきた駝鳥の羽で織った衣がある。それに、おれは水晶も一つ持っている。女はこれを透かして見ることが許されず、若い男も鞭で鍛えられたものほか、それを見てはならぬのだ。螺鈿の宝石箱には不思議なトルコ玉が三つ入れてある。額にそれをつければ、この世に存在せぬものを見ることが出来、手に握って持ち歩けば、女を産まず女にすることも出来るのだ。世にも貴重な宝ばかり。値の知れぬ宝ばかりだ。それとて全部ではない。黒檀の宝石箱に琥珀の盃が二つ、金色の林檎さながらに納まっている。敵がこれに毒を盛れば、たちまち銀色に変じるというしろものだ。琥珀を鏤めた箱の中には、玻璃を鏤めた靴がある。セレスの国から送って来たマントがある。それに、ユーフラテスの町から送って来た、柘榴石と硬玉をはめこんだ腕輪もな。……どうだ、これ以上何がほしいと言うのか、サロメ！　ほしいものを言ってみるがいい、きっとつかわす。お前のほしいものは、何でもやる。ただ一つのものを除いてはな。おれの持っているものは、何でもやる、ただ一つの命を除いては。祭司の長のマントもやる。聖壇の幕もくれてやろう」と言う。――すると、ユダヤ人たちは、「……おお！　おお！」と驚くばかりであったが、王女（サロメ）は、ただ「……私にヨカナーンの首をくださいまし」と言うだけであったのである。

＊　　＊

さて、この場面は、現王（ヘロデ）という人物は、自分が王として所有している実に多種多彩な「宝石や宝物類」などを一つ一つ具体的に名前を挙げて事細かに説明し、王女（サロメ）がその中の一つでも心動かされるようなものがあればと願いつつ、最後の「説得」に必死になって取り組んでいる場面ではあるが、しかし、現王（ヘロデ）がどのようなものを王女（サロメ）の前に提示したところで、王女（サロメ）を説得することはできず得ないのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、次のようなことである。――つまり、王女（サロメ）の「頭の中」（或いは「心の中」）にあるのは、ただただ「預言者」（ヨカナーン）のことだけであり、しかも、そもそもあれほどいやがっていた現王（ヘロデ）の前で踊ることを受け入れたのも、現王（ヘロデ）の、それは、「……おれのために踊ってくれれば、お前の欲しいものは何でもつかわそう」と堅く誓ってくれたからであり、その「言葉」を受けて、それならばと、まさに有名な「七つのヴェールの踊り」を魅惑的に踊ることになるのである。

それでは、なぜ「ヨカナーンの首」なのか？　預言者（ヨカナーン）の「牢獄からの解放」ということもあり得たのではないか？　なぜなら、王女（サロメ）は、「預言者」（ヨ

カナーン）に間違いなく「心惹かれていた」からである。つまり、王女（サロメ）にとって、今までの彼女を取り巻いていたありとあらゆる男性たちにはすべてうんざりしていたが、預言者（ヨカナーン）に直接会うことによって、唯一、生まれて初めて心惹かれるような男性にめぐり逢ったのであり、それをもっと言えば、それは、まさに王女（サロメ）の「初恋」でもあったのである。だからこそ、王女（サロメ）という女性は、預言者（ヨカナーン）の「白い肌や黒い髪また真っ赤な唇に口づけさせておくれ」と心の底からそう願ったのである。ところが、預言者（ヨカナーン）という人物は、王女（サロメ）の「白い肌や黒い髪また真っ赤な唇に口づけさせておくれ」という心の底からの願いを、すべてことごとく強く拒絶してしまったのである。それは、例えば、「……お前の肌に触らせておくれ」と言うと、「……退れ、バビロンの娘！　女こそ、この世に悪をもたらすもの。話しかけてはならぬ。聴きたくない。おれが耳をかたむけるのは、ただ神の御声のみだ」と言い、また、「……お前の髪に触らせておくれ」と言うと、「……退れ、ソドムの娘！　おれに手を触れてはならぬ、この神の宮居をけがすな」と言われ、また、「……お前の口に口づけさせておくれ」と言うと、「……触るな！　バビロンの娘！　ソドムの娘！　触ってはならぬ」と言われてしまう。つまり、「王女」（サロメ）の「要求」は、すべてことごとく強く拒絶されてしまうだけではなく、「王女」（サロメ）の「存在」そのものまでも全面的に否定されてしまうのである。それゆえ、預言者（ヨカナーン）の「真っ赤な唇に口づけ」しようとするならば、生きている状態では全く不可能であり、それゆえ、結局、死んだ「ヨカナーンの首」ということになるのである。

## 二三、現王（ヘロデ）の「斬首」の許可

さて、言葉尽きた「現王」（ヘロデ）は、席に崩れるように座り、終に「……この女に望みのものをやれ！　さすがは母親の子だ！」と叫んでしまうのである。すると、第一の兵士が近づくと共に、王妃（ヘロデヤ）はと言えば、現王（ヘロデ）の指から「死の指輪」を抜き取り、それを第一の兵士に手渡す。それを直ぐ首斬役人のところへと持ってゆくと、首斬役人のたじろぐ様子が見える。――すると、現王（ヘロデ）は、「……誰だ、おれの指輪を抜いたのは？　おれは右手に指輪をはめていたはずだ。誰だ、おれの酒を飲んでしまったのは？　おれの盃には酒がついであったはずだ。なみなみと湛えられてあったはずだぞ。誰が飲んだのか？　おお！　確かに、何か禍いが起ころうとしている。何者かの上に」と言う。一方、首斬役人（ナーマン）は、古い井戸の中へと降りていく。すると、現王（ヘロデ）は、「……ああ！　なぜおれは誓いを口にしたのか？　王は誓いを口にしてはならぬのだ。それを守らねば恐ろしいことが起こる。それを守れば、また恐ろしいことが……」と言うのであった。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……さすがはあたしの娘、よくしてくれました」と言うが、一方の現王（ヘロデ）はと言えば、「……確かに、何か禍いが起ころうとしているのだ、何者かの上に」と繰り返すばかりである。

＊　　＊

一方、王女（サロメ）は、古井戸の上に身をかがめ耳を澄ます。「……音もしない。何も聞こえぬ。どうして声を上げないのだろう、あの男は？　ああ！　誰かがあたしを殺そうとしたら、あたしは大声を上げて、暴れまわるだろう。じっとしてなどいるものか。…

…斬っておしまい、斬って、ナーマン。斬れというのに……音もしない。何も聞こえぬ。静まり返っている。不気味なほどに。ああ！　何か土の上に落ちるような。確かに聞こえた、何か落ちる音が。あれは首斬役人の刀。恐れているのだ、あの奴隷は！　それで刀を落としてしまったのだ。あの男が殺せないのだ。なんて臆病な奴隷だろう！　兵士を遣らなければ。（ヘロデヤの小姓を見つけ、話しかける）、ここへおいで。お前はあの死んだ男の友だちだったね？　でも、まだ死に足りぬらしい。兵士たちに命じておくれ、穴ぐらに降りて行って、あたしの望みのものを持って来るようにと、王があたしに約束なさったものを、あたしのものを、持って来るようにと。（小姓は尻込みする。サロメ、兵士たちを振り返り）、ここへおいで、兵士たち、穴ぐらに降りて行って、おの男の首を取って来ておくれ。（兵士たち、尻込みする）、王さま、王さま、兵士たちにお命じくださいまし、ヨカナーンの首を取って来るようにと」と言うのであった。

＊　＊

さて、この場面は、言葉尽きた「現王」（ヘロデ）は、席に崩れるように座り、終に「……この女に望みのものをやれ！　さすがは母親の子だ！」と叫んでしまうのである。すると、王妃（ヘロデヤ）は、現王（ヘロデ）の指から「死の指輪」を抜き取り、それを第一の兵士に手渡すことになる。これは、王妃（ヘロデヤ）がいかにどれほど強く預言者（ヨカナーン）の「死」を心の底から望んでいるかが、はっきりと分かる場面でもある。

一方、王女（サロメ）は、古井戸の上に身をかがめて耳を澄ます。「……音もしない。何も聞こえぬ。どうして声を上げないのだろう、あの男は？　ああ！　誰かがあたしを殺そうとしたら、あたしは大声を上げて、暴れまわるだろう。じっとしてなどいるものか。……斬っておしまい、斬って、ナーマン。斬れというのに……音もしない。何も聞こえぬ。静まり返っている。不気味なほどに。ああ！　何か土の上に落ちるような。確かに聞こえた、何か落ちる音が。あれは首斬役人の刀。恐れているのだ、あの奴隷は……」となるが、これを読むと、王女（サロメ）も非常に強く「ヨカナーンの首」を求めているのである。

つまり、王妃（ヘロデヤ）が預言者（ヨカナーン）の「死」を心の底から望んでいる理由は、まさに百％「恨みと憎しみ」だけであるが、一方、王女（サロメ）が預言者（ヨカナーン）の「首」を心の底から望んでいる理由は、まさに「愛と憎しみ」とが入り交じった極めて複雑かつ微妙な「心理状態」からなのである。――一方、現王（ヘロデ）が預言者（ヨカナーン）の「死」を何が何でも避けたいと望んでいる理由は、まさに「……もしあの男が死にでもしたら、何か禍いが起こるかもしれぬ、おれの上にな。事実、あの男は言っている、自分が死ぬ日には何者かに禍いが起ころうとな。それこそ、このおれにほかならない」のだと恐れているのである。つまり、「……確かに、何か禍いが起ころうとしているのだ、何者かの上に」という極めて不安な「精神状態」になっているのである。

## 二四、サロメとヨカナーンの首との対話

さて、「……大きな黒い腕、銀の楯の上にヨカナーンの首をのせた首斬役人の黒い腕が、古井戸からせりあがる。サロメ、その首を掴む。ヘロデは、マントで顔を隠し、ヘロデヤは、微笑して扇をつかう。ナガレ人たちは、膝まづいて祈り始める」とある。

＊　＊

王女（サロメ）は、「……ああ！　お前はその口に口づけさせてくれなかったね、ヨカナーン。さあ！　今こそ、その口づけを。この歯で噛んでやる、熟れた木の実を噛むように。そうするとも、あたしはお前の口に口づけするよ、ヨカナーン。あたしはお前にそう言ったね？　あたしはお前にそう言った。さあ！　今こそ、その口づけを。……でも、どうしてあたしを見ないのだい、ヨカナーン？　お前の眼は、さっきはあんなにも恐ろしく、怒りと蔑みにみちていたのに、今はじっと閉じている。どうして閉じているのだい？　その眼をおあけ！　目蓋を開いておくれ、ヨカナーン。どうしてあたしを見ようとしないのだい？　あたしがこわいのかい、ヨカナーン、それであたしを見ようとしないのかい？……それにお前のその舌、毒を吐く赤い蛇のようだったその舌も、もう動かない、今はもう何も言わないのだね、ヨカナーン、あたしに向って毒を吐いたあの真赤な蝮も。不思議だとは思わないかい？　その赤い蝮はどうしてもう動かないのだろう？……お前は一寸も私をほしがらなかった。ヨカナーン。お前はあたしを卻けた。ひどい言葉をわたしに投げつけた。まるで淫売か浮気女のように扱った。このあたしを、サロメを、ヘロデヤの娘ユダヤの王女を！　いいよ、ヨカナーン、このあたしは、まだ生きているのだもの、でも、お前は、死んでしまって、お前の首はもうあたしのものだもの。どうにでも出来るのだよ。あたしの気の済むように。犬にでも、空とぶ鳥にでも投げてやれるのだよ。犬に食べさせたその残りを、空とぶ鳥がつつくだろう。……ああ！　ヨカナーン、ヨカナーン、お前ひとりなのだよ。あたしが恋した男は。ほかの男など、みんなあたしには厭わしい。でも、お前だけは綺麗だった。お前の体は銀の台座に据えた象牙の柱。それは、鳩が群がり、白百合の咲きこぼれる庭。象牙の楯を飾りつけた銀の塔。この世にお前の体ほど白いものはなかった。お前の髪ほど黒いものはなかった。この世のどこにもお前の口ほど赤いものはなかった。お前の声は、不思議な馨りをふりまく香炉、そして、お前を見つめていると不思議な楽の音が聞こえて来たのに！　ああ！　どうしてお前はあたしを見なかったのだい、ヨカナーン？　手の陰に、呪いの陰に、お前はその顔を隠してしまった。神を見ようとする者の目隠しで、その眼を覆うてしまったのだ。確かに、お前はそれを見た、お前の神を、ヨカナーン、でも、あたしを、このあたしを、……お前はとうとう見てはくれなかったのだね。一目でいい、あたしを見てくれさえしたら、きっといとしゅう思うてくれたろうに。だのに、あたしは、このあたしはお前を見てしまったのだよ、ヨカナーン、そうして、あたしはお前を恋してしまったのだ。ああ！　あんなにも恋こがれていたのに。今だって恋いこがれている。ヨカナーン。恋しているのはお前だけ。……あたしはお前の美しさを飲みほしたい。お前の體に飢えている。酒も木の実も、このあたしの欲情を満たしてはくれぬ。どうしたらいいのだい、ヨカナーン、今となっては？　洪水も大海の水も、このあたしの情熱を癒してはくれぬのだもの。あたしは王女だった。それをお前はさげすんだ。あたしは生娘だった。その花をお前は穢してしまったのだ。あたしは無垢だった。その血をお前は燃ゆる焔で濁らせた。……ああ！　ああ！　どうしてお前はあたしを見なかったのだい、ヨカナーン？　一目でいい、あたしを見てくれさえしたら、きっといとしゅう思うてくれたろうに。そうとも、そうに決まっている。恋の測り難さに比べれば、死の測り難さなど、何程のことでもあるまいに。恋だけを、人は一途に想うておればよいものを」と言うのであった。

＊　　＊

さて、この「場面」こそ、王女（サロメ）の「本心」（本音）そのものがはっきりと語られている部分であるが、それは、次のようなことである。――まず、王女（サロメ）は、「……ああ！　お前はその口に口づけさせてくれなかったね、ヨカナーン。さあ！　今こそ、その口づけを。この歯で噛(か)んでやる、熟れた木の実を噛(か)むように。そうするとも、あたしはお前の口に口づけするよ、ヨカナーン。あたしはお前にそう言ったね？　あたしはお前にそう言った。さあ！　今こそ、その口づけを……」と言うのである。――つまり、王女（サロメ）にしてみれば、ほんとうは「生きたヨカナーン」の口に口づけをしたかったのである。ところが、「……お前はその口に口づけさせてくれなかった」からこそ、仕方なく、「死んだヨカナーン」の口に口づけしようとしているのであるが、この「口づけ」という行為は、単なる「物理的な行為」であるというよりは、むしろ「自分を受け入れてくれるのか、それとも自分を拒絶するのか」の、極めて「象徴的な行為」でもあるのである。そして、王女（サロメ）が、その「死んだヨカナーン」の口に口づけしようとしているのは、まさに「何が何でも自分を受け入れさせようとする行為」でもあるのである。

次に、「……でも、どうしてあたしを見ないのだい、ヨカナーン？　お前の眼は、さっきはあんなにも恐ろしく、怒りと蔑みにみちていたのに、今はじっと閉じている。どうして閉じているのだい？　その眼をおあけ！　目蓋(まぶた)を開いておくれ、ヨカナーン。どうしてあたしを見ようとしないのだい？　あたしがこわいのかい、ヨカナーン、それであたしを見ようとしないのかい？　……それにお前のその舌、毒を吐く赤い蛇(へび)のようだったその舌も、もう動かない、今はもう何も言わないのだね、ヨカナーン、あたしに向って毒を吐いたあの真赤な蝮(まむし)も。不思議だとは思わないかい？　その赤い蝮(まむし)はどうしてもう動かないのだろう？」と言っている。これは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、次のようなことである。――つまり、「生きたヨカナーン」と「死んだヨカナーン」とのまさに「比較対照」になっているとともに、王女（サロメ）にしてみれば、「……自分を見てほしい、自分に話しかけてほしい。それなのに、どうして眼を閉じているのだい、どうして口を閉ざしているのだい」と、いわば「自問自答」をしているのである。

さて、次は、「……お前は一寸(ちょっと)も私をほしがらなかった。ヨカナーン。お前はあたしを卻(しりぞ)けた。ひどい言葉をわたしに投げつけた。まるで淫売か浮気女のように扱った。このあたしを、サロメを、ヘロデヤの娘ユダヤの王女を！　いいよ、ヨカナーン、このあたしは、まだ生きているのだもの、でも、お前は、死んでしまって、お前の首はもうあたしのものだもの。どうにでも出来るのだよ。あたしの気の済むように。犬にでも、空とぶ鳥にでも投げてやれるのだよ。犬に食べさせたその残りを、空とぶ鳥がつつくだろう。……」と言っている。――これは、まさに立場の「逆転」であり、生きている時には、ヨカナーンは、わたしを寄せつけもしなかったが、しかし、死んだ今は、「……お前の首はもうあたしのもの。どうにでも出来るのだよ。あたしの気の済むように。犬にでも、空とぶ鳥にでも投げてやれるのだよ。……」ということである。――つまり、王女（サロメ）にしてみれば、最初から預言者（ヨカナーン）という人物は、「……自分を完全に無視して、自分を少しも見ようとしない。自分を少しも知ろうともしない」。それは、「……ほんとうのわたしを少しも見ようともせず、ほんとうのわたしを少しも知ろうともせず、それゆえ、ほんとうのわたしなど何ひとつ知りもしないくせに」、ただ「頭ごなし」に、「……ひどい言葉をわたしに投げつけた。まるで淫売か浮気女のように扱った。このあたしを、サロメを、

ヘロデヤの娘ユダヤの王女を」となるのである。そして、王女（サロメ）にしてみれば、それこそは、まさに絶対に「許せない」ということであり、なぜ、自分をもっと見ようとしなかったのか、なぜ、もっと自分を知ろうとしなかったのか、そうすれば、こんなことにはならずにすんだのにと言いたいのである。

## 二五、王女（サロメ）の「本心」（本音）

そして、次こそ、まさに王女（サロメ）の「本心」（本音）そのものが決定的に語られている部分であり、それは、次のようなものである。まず、「……ああ！　ヨカナーン、ヨカナーン、お前ひとりなのだよ。あたしが恋した男は。ほかの男など、みんなあたしには厭わしい。でも、お前だけは綺麗だった。（中略）、この世にお前の體ほど白いものはなかった。お前の髪ほど黒いものはなかった。この世のどこにもお前の口ほど赤いものはなかった。お前の聲は、不思議な馨りをふりまく香炉、そして、お前を見つめていると不思議な楽の音が聞こえて来たのに！　ああ！　どうしてお前はあたしを見なかったのだい、ヨカナーン？　手の陰に、呪いの陰に、お前はその顔を隠してしまった。神を見ようとする者の目隠しで、その眼を覆うてしまったのだ。確かに、お前はそれを見た、お前の神を、ヨカナーン、でも、あたしを、このあたしを……お前はとうとう見てはくれなかったのだね。一目でいい、あたしを見てくれさえしたら、きっといとしゅう思うてくれたろうに……」となるのである。

＊　　＊

さて、王女（サロメ）は、「……ああ！　ヨカナーン、ヨカナーン、お前ひとりなのだよ。あたしが恋した男は。ほかの男など、みんなあたしには厭わしい。でも、お前だけは綺麗だった」と言っている。それは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。――例えば、現王（ヘロデ）を初めとして、若いシリア人（親衛隊長）や現王（ヘロデ）の誕生祝いに招待された高官や将校やガリラヤの名士たち、その他のすべての男たちは、結局、わたし（或いは「女というもの」）を「色目」で見るような男たちだったのである。しかし、唯一、預言者（ヨカナーン）だけは「そうではなかった」のである。預言者（ヨカナーン）は、ひたすら「神」だけを見ていて、わたし（或いは「女というもの」）を全く見ようとはしなかったのである。

それでは、なぜ、「……この世にお前の體ほど白いものはなかった。お前の髪ほど黒いものはなかった。この世のどこにもお前の口ほど赤いものはなかった。お前の聲は、不思議な馨りをふりまく香炉、そして、お前を見つめていると不思議な楽の音が聞こえて来たのに！」となるのだろうか？、それは、預言者（ヨカナーン）の「心身」（「白い體も黒い髪も赤い唇もその心魂」も、この世の実に様々な「俗悪」（例えば「色や欲」その他）などに少しも塗れてはいなかったからである。だからこそ、「……お前だけは綺麗だった」（お前だけは「純潔だった」）となるのである。

＊　　＊

一方、「……あたしは、このあたしはお前を見てしまったのだよ、ヨカナーン、そうして、あたしはお前を恋してしまったのだ。ああ！　あんなにも恋こがれていたのに。今だって恋いこがれている。ヨカナーン。恋しているのはお前だけ。……あたしはお前の美し

さを飲みほしたい。お前の體に飢えている。酒も木の実も、このあたしの欲情を満たしてはくれぬ。どうしたらいいのだい、ヨカナーン、今となっては？　洪水も大海の水も、このあたしの情熱を癒してはくれぬのだもの。あたしは王女だった。それをお前はさげすんだ。あたしは生娘だった。その花をお前は穢してしまったのだ。あたしは無垢だった。その血をお前は燃ゆる焔で濁らせた。……ああ！　ああ！　どうしてお前はあたしを見なかったのだい、ヨカナーン？　一目でいい、あたしを見てくれさえしたら、きっといとしゅう思うてくれたろうに。そうとも、そうに決まっている。恋の測り難さに比べれば、死の測り難さなど、何程のことでもあるまいに。恋だけを、人は一途に想うておればよいものを」と言うのである。

＊　　＊

さて、王女（サロメ）は、「……あたしは、このあたしはお前を見てしまったのだよ、ヨカナーン、そうして、あたしはお前を恋してしまったのだ。ああ！　あんなにも恋こがれていたのに。今だって恋いこがれている。ヨカナーン。恋しているのはお前だけ。……あたしはお前の美しさを飲みほしたい。お前の體に飢えている．酒も木の実も、このあたしの欲情を満たしてはくれぬ。どうしたらいいのだい、ヨカナーン、今となっては？　洪水も大海の水も、このあたしの情熱を癒してはくれぬのだもの……」と言っている。

それでは、なぜ、「預言者」（ヨカナーン）を「牢獄から解放」（つまり「救い出す」）という方法を採らなかったのか？　その方法もあり得たのである。もちろん、預言者（ヨカナーン）を「牢獄から解放」（つまり「救い出した」）としても、預言者（ヨカナーン）という人は、ひたすら「神」だけを見ているのであり、それゆえ、振り向く可能性は限りなくゼロには近いが、しかし、それでも「可能性」は残るのである。それでは、なぜ、敢えて「ヨカナーンの首」を求めたのだろうか？　それは、まさに「愛と憎しみ」からであり、もし「愛」だけであれば、「牢獄から解放」（つまり「救い出す」）という方法をあり得たのである。――まず、「愛」の方は、生きたヨカナーンは、ひたすら「神」だけを見ていて、少しもわたしの方を振り向いてはくれない。それゆえ、生きたヨカナーンを手に入れることはほとんど不可能であり。それゆえ、結局、死んだヨカナーンを手に入れるしかなかったのである。そして、もう一方の「憎しみ」は、次のような理由からである。つまり、「……あたしは王女だった。それをお前はさげすんだ。あたしは生娘だった。その花をお前は穢してしまったのだ。あたしは無垢だった。その血をお前は燃ゆる焔で濁らせた。……ああ！　ああ！　どうしてお前はあたしを見なかったのだい、ヨカナーン？　一目でいい、あたしを見てくれさえしたら、きっといとしゅう思うてくれたろうに。そうとも、そうに決まっている。恋の測り難さに比べれば、死の測り難さなど、何程のことでもあるまいに。恋だけを、人は一途に想うておればよいものを」となるのである。

＊　　＊

つまり、預言者（ヨカナーン）という人は、ほんとうのわたしの何ひとつも知らないくせに、ただ淫らな「両親」の「王女」というただそれだけでわたしをさげずんだのだ。また、あたしは「生娘」だった。それが「ほんとうのあたし」だったのに、そのわたしを「……まるで淫売か浮気女のように扱った」のだ。そのために、お前は、その花（生娘のわたし）を穢してしまったのだ。そして、あたしは「無垢」だった。それが「ほんとうのあたし」だったのに、そのわたしを「……まるで両親と同じ淫らな女だと決めつけてしまった」

のだ。そのために、お前は、その血（わたしの無垢の心）を燃ゆる焔で濁らせてしまったのだ。それこそ、まさに絶対に「許せない」ということである。「……どうしてお前は（ほんとうの）あたしを見なかったのだい、ヨカナーン？　一目でいい、（ほんとうの）あたしを見てくれさえしたら、きっといとしゅう思うてくれたろうに。そうとも、そうに決まっている」となるのである。――また、「恋の測り難さ」というのは、すなわち、お互いがお互いをほんとうに深く理解し合う難しさと、その恋の行方の難しさに比べれば、「死の測り難さ」、つまり、死とは何か、死はいつどのように訪れて、あの世はどうなっているのかを知る難しさなどは、何程のことでもなく、そして、「……恋だけを、人は一途に想うておればよいものを」とあるが、これは、預言者（ヨカナーン）のように、ひたすら「神」だけを見るというのではなく、むしろ「恋だけ」を（……それは「神やあの世や死」のことばかりをひたすら思うのではなく、むしろ「この世を人間を生」をこそ）、人は一途に想うておればよいのである。

## 二六、最後の結末へ

さて、現王（ヘロデ）は、「……不埒な女だ、お前の娘は、不埒の女だぞ。いずれにせよ、あれのしたことは大きな罪なのだ。おれたちの知らぬ神に、あれは罪を犯したのだ」と言う。すると、王妃（ヘロデヤ）は、「……娘のしたことはよいこと、私はもうここにこうしておりましょう」と言う。現王（ヘロデ）は、立ちあがり、「……ああ！　けがらわしい近親相姦の妃め、またしてもそのようなことを？　来い！　おれはここにいとうはない。来いというのに。蟲が知らせる、何か禍いが起ころうとしているのだ。マナセ、イサカル、オジアス、篝りを消せ。おれは何も見たくないのだ。何ものにも見られたくないのだ。篝りを消せ！　月を隠せ！　星を隠せ！　われらも宮殿のなかに隠れよう、ヘロデヤ、おれはそら恐ろしゅうなって来た」と言うのであった。

＊

さて、この場面は、現王（ヘロデ）は、「……不埒な女だ、お前の娘は、不埒の女だぞ。いずれにせよ、あれのしたことは大きな罪なのだ。おれたちの知らぬ神に、あれは罪を犯したのだ」と言うのであった。――まず、「不埒な女」というのは、「……道理にはずれ、ふとどきで、けしからぬ、はしたない女」ということであり、預言者（ヨカナーン）を「斬首」したことで、どんな恐ろしい「禍い」が自分（たち）に襲いかかって来るかも知れないと、現王（ヘロデ）は、そら恐ろしゅうなって来たということで、王妃（ヘロデヤ）と一緒に早く宮殿のなかに隠れようとしているのに、一方、王妃（ヘロデヤ）はと言えば、むしろ「大満足」であり、「……娘のしたことはよいこと、私はもうここにこうしておりましょう」と言うのである。それを聞いて呆れ果てた現王（ヘロデ）は、おれは何も見たくないのだ。何ものにも見られたくない、篝りを消せ！　月を隠せ！　星を隠せ！　と命令し、宮殿のなかに隠れようとしているのである。

＊

すると、奴隷たちが篝火を消す。星が消える。大きな黒い曇が月をよぎり、完全に月を隠してしまう。舞台は、非常に暗くなる。ヘロデ、階段を昇りはじめる。……

一方、王女（サロメ）は、「……ああ！　あたしはとうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカナーン、お前の口に口づけしたよ。お前の唇はにがい味がする。血の味なのかい、これは？　いいえ、そうではなうて、たぶんそれは恋の味なのだよ。恋はにがい味がするとか。でも、それがどうしたのだい？　どうしたというのだい？　あたしはとうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカナーン、お前の口に口づけしたのだよ」と言うのである。

＊　　＊

さて、この場面は、王女（サロメ）が、「……ああ！　あたしはとうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカナーン、お前の口に口づけしたよ」と、遂にその「目的」を達成した「喜び」を語っている場面でありながら、なぜか、お前の唇は「にがい味」がする、というのは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。――つまり、「生きたヨカナーン」に口づけをしたならば、或いは、「甘い味」がしたのかも知れないが、一方、「死んだヨカナーン」に口づけをしたからこそ、まさに「……お前の唇はにがい味がする。血の味なのかい？……」となるのである。そして、「……そうではなうて、たぶんそれは恋の味なのだよ。恋はにがい味がするとか。でも、それがどうしたのだい？　どうしたというのだい？」と、いわば「自問自答」をしているのである。――つまり、王女（サロメ）にしてみれば、「生きたヨカナーン」に口づけ出来たならば、どれだけ良かったろうかと思いながらも、何もかも思い通りにいかないのがまさに男女の「恋愛」、それこそ、まさに「恋の味」であり、だからこそ、「恋の味」というのは、ただ「甘いだけの味」ではなく、むしろ「ほろにがい味」になるのである。しかし、「……それがどうしたのだい？　どうしたというのだい？　あたしはとうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカナーン、お前の口に口づけしたのだよ」となるが、この最後の「せりふ」は、もちろん、ほんとうは「生きたヨカナーン」に口づけ出来ればよかったが、しかし、たとえ「死んだヨカナーン」であっても、あれほど絶対的に拒絶していた「ヨカナーンの赤い唇」にともかくも口づけ出来たのだから、それはそれで「目的」を達成した「喜び」はあるのである。――それは、「愛」だけの「甘い味」の「喜び」ではなく、むしろ「愛と憎しみ」の入り交じった「にがい味」の「喜び」であったのである。

一條の「月の光」がサロメを照らし出す。……

すると、現王（ヘロデ）は、「……振り返ってサロメを見、殺せ、あの女を！」と叫ぶのであった。――すると、兵士たちは突き進み、楯の下に、ヘロデヤの娘、ユダヤの王女、サロメを押し殺す。というところで幕になるのである。（完結）

＊　　＊

さて、ここで最大の「問題」となるのは、なぜ、現王（ヘロデ）は、王女（サロメ）を見て、「殺せ！」と命令したのだろうか？　あれほど恋い慕っていた「王女」（サロメ）を、なぜ「殺せ！」と言うのだろうか？　それは、次のようなことである。

まず、現王（ヘロデ）という人は、「……おれの領土の半分でも、おれの宝のすべてでも、何でもお前にやろう」と、あれほど何度も説得したにも拘わらず、王女（サロメ）は、その「説得」に全く応じず、ただひたすら「預言者」（ヨカナーン）の首を求めるばかりで、結局、言葉尽きた「現王」（ヘロデ）は、席に崩れるように座り、終に「……この女

に望みのものをやれ！……」と叫んでしまうのである。――その結果、どんなに恐ろしい「禍（わざわ）い」が自分（たち）に襲いかかって来るかも知れないと、非常に恐れているのである。それは、「……あの男はたぶん神の使いであろう。確かに神の使いに違いない。聖者なのだぞ。神の指先があの男に触れたのだ。神があの男の口に恐ろしい言葉を預（あず）けたのだ。宮殿のうちにあっても、荒野におった時と同じに、神は常にあの男と共にある。……とにかく、そうとしか思われぬ。もちろん、誰にも解ることではない、が、恐らく、神はあの男に身方し、あの男と共にあるに違いない。となれば、もしあの男が死にでもしたら、何か禍（わざわ）いが起こるかもしれぬ、このおれの上にな。事実、あの男は言っている、自分が死ぬ日には何者かに禍（わざわ）いが起ころうとな。それこそ、このおれのほかにはない。覚えていよう、おれはさっきここへ出て来た時、血に足を滑らせた。それに、おれは何か空に羽ばたく音を、途方もなく大きな翼の羽ばたく音を聞いている。いずれもこの上ない不吉な前ぶれだ。その上、まだあるが、まあ、いい！　サロメ、まさかお前は望みはしまい、このおれに禍（わざわ）いあれかしとは！　お前がそのようなことを望むはずがない」と思っていたが、今や、王女（サロメ）は、それを望むようなことをしてしまったのである。それこそ、まさに「許せない」ことの一つであり、そして、もう一つは、次のようなことである。

それは、王女（サロメ）の、血に染まった「死んだヨカナーンの斬首（ざんしゅ）」の「口」に口づけしながら、「……ああ！　あたしはとうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカナーン、お前の口に口づけしたよ。お前の唇（くちびる）はにがい味がする。血の味なのかい、これは？　いいえ、そうではなうて、たぶんそれは恋の味なのだよ。恋はにがい味がするとか。でも、それがどうしたのだい？　どうしたというのだい？　あたしはとうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカナーン、お前の口に口づけしたのだよ」と、「独り言」を言っている王女（サロメ）の姿、その「姿（すがた）」は、とても「正気の沙汰」とは思えない。それは、まるで「狂女」そのものの姿に見えたに違いない。そのような「狂女」そのものをこのまま放っておくわけにはいかない。それこそ、どのような恐ろしい「禍（わざわ）い」が、自分にも、国家にも、その他、ありとあらゆるものに襲いかかって来るかも知れない。そのような「狂女」を生かしてはおけない、と思った瞬間、まさに「殺せ！」という言葉が、ほとんど無意識のうちに、「現王」（ヘロデ）の口から発せられたということである。

## 二七、結び

さて、オスカー・ワイルドという劇作家は、いわゆる『新約聖書』の中にある「マルコ伝」や「マタイ伝」の「ヘロデとヨハネ」の「記述部分」を参考にしながら、まさに『サロメ』という非常に有名な「戯曲」を書き上げることになるが、しかし、『新約聖書』に記述されている「内容」が、そのまま戯曲『サロメ』の「内容」（筋書き）になっているということではない。それは、当然のことながら、オスカー・ワイルドという劇作家独自の戯曲『サロメ』へとその「内容」を大きく創（つく）り換えているのである。それでは、一体、どこをどのように書き換えたのかと問えば、それは、次のようなところである。

まず、オスカー・ワイルドという劇作家は、いわゆる『新約聖書』の中にある「マルコ伝」と「マタイ伝」の「ヘロデとヨハネ」の「記述部分」の、一体、どちらを選んで、戯曲『サロメ』を書き上げたのかと敢えて問えば、それは、「マルコ伝」の「ヘロデとヨハ

ネ」の「記述部分」の方を選んだのであり、それゆえ、「マタイ伝」の「ヘロデとヨハネ」の「記述部分」ではなかったということである。――それでは、「マルコ伝」と「マタイ伝」のどこがどのように違うのかと問えば、その最大の「箇所」は、「マルコ伝」では、「……王妃（ヘロデヤ）は、預言者（ヨハネ）を恨み、彼を殺そうと思っていたが、出来ないでいた。それは、現王（ヘロデ）がヨハネを正しい聖なる人であると知って、彼を恐れ、また、保護を加えていたからである」という、この「内容」に沿って、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』は書き上げられているのである。

一方、「マタイ伝」では、「……現王（ヘロデ）は、預言者（ヨハネ）を殺したいと考えたが、民衆が予言者と思っていたので、彼らが騒ぎ出すのを恐れた。……」とある。（本来、こちらの方が「歴史的事実」に近いが）、それはともかく、戯曲『サロメ』では、「現王」（ヘロデ）という人は、一度も「預言者」（ヨカナーン）を殺そうとは思わず、むしろ「王女」（サロメ）の「ヨカナーンの首を」という要求を、「それは、ならぬ」と何度も何度も却けて、何とか王女（サロメ）を説得しようとしているのである。それゆえ、「マルコ伝」の「ヘロデとヨハネ」の「記述部分」の方を選んだことは、明らかなことである。

次に、「現王」（ヘロデ）と「王妃」（ヘロデヤ）という登場人物であるが、この二人は、まさに「マルコ伝」の「ヘロデとヨハネ」の「記述部分」の「内容」にほぼ沿った「人物設定」になっているかと思う。――それでは、一体、どこをどのように「大きく書き換えた」のかと敢えて問えば、それは、まさに「預言者」（ヨカナーン）と「王女」（サロメ）の、この二人の「人物設定」を大きく書き換えたのである。――まず、「預言者」（ヨカナーン）であるが、「マルコ伝」の「ヘロデとヨハネ」の「記述部分」の中では、「……ヨハネを捕えて牢につないだことがあった」。それは、ヨハネがヘロデに、「……兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。この「部分」は、戯曲『サロメ』でも全く同じであるが、それ以外の、例えば、古井戸の中から何度も「大きな声」で様々な内容を叫んでいる場面、また、「預言者」（ヨカナーン）と「王女」（サロメ）とが会って、直接「会話を交わす場面」などは、すべて「創作」（フィクション）になっている。

一方、「王女」（サロメ）であるが、その「王女」（サロメ）については、「マルコ伝」も「マタイ伝」もほぼ「同じ内容」であり、それは、「……現王（ヘロデ）の誕生祝いがあった時、王妃（ヘロデヤ）の娘（サロメ）が満座の中で舞を舞い、現王（ヘロデ）を喜ばせた」。そのため「現王」（ヘロデ）は、娘に「……願うものは何でもやろう」と誓った。娘は、母の入れ知恵で、「……洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、今ここに頂きとうございます」と言った。これが、まさに『聖書』のなかの「記述内容」である。――つまり、「歴史的事実」としては、まず、「預言者」（ヨハネ）と「王女」（サロメ）との直接の「接点」は全くなかったのである。それゆえ、二人が「会う」こともなければ、直接「会話を交わす」ことも全くなかったのである。それゆえ、「王女」（サロメ）が「洗礼者ヨハネの首」を求める理由も全くないのである。それは、まさに「王妃」（ヘロデヤ）の「要求」であり、「王女」（サロメ）は、ただ「踊る」だけの存在に過ぎなかったのである。

ところが、戯曲『サロメ』では、「王女」（サロメ）は、まさに堂々たる「女主人公」（ヒロイン）となり、「王女」（サロメ）の「登場」場面から、最後の最後まで、一貫して、「女主人公」（ヒロイン）を演じ切っている。――ここが、まさに『聖書』の「記述内容」と全く違うところであり、しかも、「預言者」（ヨカナーン）の「首」を求めるのは、まさ

に「王女」（サロメ）自身であり、決して「王妃」（ヘロデヤ）ではないのである。それでは、「王女」（サロメ）は、一体、何のために「預言者」（ヨカナーン）の「首」を求めたのだろうか？　それは、まさに「愛と憎しみ」からである。――つまり、一方の「愛」は、「預言者」（ヨカナーン）に「恋」をしてしまい、「預言者」（ヨカナーン）の「赤い唇」に何が何でも「口づけをさせておくれ」という極めて「強い欲求」からであり、そして、もう一方の「憎しみ」は、次のようなものである。――つまり、「預言者」（ヨカナーン）という人は、ほんとうのわたしの何ひとつも知らないくせに、ただ淫らな「両親」の「王女」というただそれだけでわたしをさげずんだのだ。また、あたしは「生娘」だった。それが「ほんとうのあたし」だったのに、そのわたしを「……まるで淫売か浮気女のように扱った」のだ。さらに、あたしは「無垢」だった。それが「ほんとうのあたし」だったのに、そのわたしを「……まるで両親（母親）と同じ淫らな女だと決めつけてしまった」のだ。それこそは、まさに絶対に「許せない」ことになるのである。だからこそ、「……どうしてお前は（ほんとうの）あたしを見なかったのだい、ヨカナーン？　一目でいい、（ほんとうの）あたしを見てくれさえしたら、きっといとしゅう思うてくれたろうに。そうとも、そうに決まっている」となるのである。

＊　　＊

ちなみに、この「二人」は、なぜ「惨殺され」なければならなかったのか！　それは、「二人」とも余りにも「極端すぎた」からである。つまり、一方は、あまりに「精神的になり過ぎている」、それは、一方の「極」であり、そして、もう一方は、あまりに「肉体的になり過ぎている」、それは、もう一方の「極」である。つまり、「二人」は、まさにそれぞれの「両極」に位置するのであり、それゆえ、このオスカー・ワイルドの『サロメ』という戯曲の中では、この「二人」は、まさに「惨殺されることになってしまう」のである。もちろん、実際は、確かに「預言者」（ヨハネ）は、まさに「首を切られる」ことになるが、一方、「王女」（サロメ）は、生前、実際に「預言者」（ヨハネ）に直接会うこともなければ、また、自らが「惨殺される」こともなかったのである。これらは、すべてオスカーワイルドの「創作」（フィクション）の部分であるが、しかし、そこにこそ、「作者」（オスカー・ワイルド）という劇作家の「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが最も如実に表に表れやすい部分でもあるのである。……（完）

＊　　＊

「参考文献」

※底本「刺青」谷崎潤一郎著（「青空文庫」）
※底本「高野聖」泉鏡花著（「青空文庫」）
※底本「刺青・秘密」谷崎潤一郎著（「新潮文庫」）
※底本「高野聖・眉かくしの霊」泉鏡花著（「岩波文庫」）
※底本「変身、他一篇」カフカ作・山下肇訳（「岩波文庫」）
※底本「サロメ」ワイルド作　福田恆存訳（「岩波文庫」）
※底本「サロメ・ウィンダミア卿婦人の扇」西村孝次訳（「新潮文庫」）
※底本「福音書」塚本虎二訳（「岩波文庫」）
※底本「関連のウェブサイト、その他」等々。